宰相閣下とパンダと私

黒辺あゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宰相閣下とパンダと私

【Ｎコード】
Ｎ５６１５Ｗ

【作者名】
黒辺あゆみ

【あらすじ】
アヤは死んだ父親が残した借金におわれて生活する女子高生。ある日借金取りから逃げていたら、借金取りのいない世界へ来てしまった。そこでパンダっぽい生き物に食べ物をたかられた挙句に懐かれるし、せっかく借金取りがいなくなったのに借金をつくってしまうし。それに何故だか麗しの宰相閣下と一つ屋根の下を通り越して、一つ部屋の中で寝ることになってしまう。乙女にとっては大問題だ！そんな宰相閣下とアヤの関係は、九割の誤解と思い込み、そして一割の真実でできています。

プロローグ

その日も、朝から麗しの宰相閣下の怒声が城に響き渡った。
「アヤー！！触るなと何度言ったら分かるのだ！！」
怒り顔の宰相閣下に、怒鳴られた方も負けじと言い返す。
「知りませんよそんなこと！！大事ならちゃんと手の届かない場所に鍵をかけとけって話なのよ！！」
これまた城に響く少女の声に、城の者は「ああ、またか」という顔をした。
　この怒声の応酬は、宰相閣下の執務室近辺における、毎日の日課のようなものである。これを聞いた城の者は、「今日も平和だなぁ」と思うのである。
　会話だけを聞けば、とても仲が悪い二人に思える。しかし、これが犬も食わぬなんとやらだということを知っている城の者は、二人の間に決して入ろうとはしない。

この少女と宰相閣下の物語を、最初から語ることにしよう。

1話　アヤ、借金取りから逃げる

アヤの物心ついた頃に、母親はいなくなった。近所のおばちゃんの話によると、若い男と逃げたらしい。その後は酒におぼれた父親と二人暮らしだった。しかしその父親も、酒が祟ってアヤが中二の頃に死んだ。借金という莫大な財産を残して。頼れる親類は誰もいない。バイトと奨学金で辛うじて高校に通えていた。

　そんな薄幸少女アヤも、本日はバイト先の給料日。切り詰めて生活している毎日だが、今日はちょっと贅沢をしてクリームコロッケを買ってしまった。ほんのちょっとの贅沢だ、冷めないうちに帰って食べたい。

　そんなめでたい日の夜に、アヤは繁華街を全速力で駆けていた。東京の夜の繁華街に、セーラー服姿は非常に目立っている。

「待てやコラァ！」

「金よこせやコラァ！」

「くうっ、しつこい！」

追ってくる借金取りに、アヤは焦る。

　どうやら給料日をかぎつけたらしい。この調子ではまたバイトを変えねばならないだろう。今のバイトは食事がつくから気に入っていたのに！

　ささやかな贅沢も味わえないなんて、それもこれも誰のせいかと言えば。

「恨むからねクソ親父ー！！」

父親が残した、闇金への借金が原因である。何をどうやったらこんな金額になるんだという借金額は、それこそ臓器を売っても足りないかもしれない。女の子なアヤは、文字通り身体を売るという手段も残っていた。ソープで働くことは、毎日借金取りが念押ししてくる手段である。しかし。

「私だってねぇ、夢も希望も恋愛願望だってあるのよ！」

少女漫画のような恋を期待して何が悪い、白馬の王子様を信じちゃいけないのか。いや、この際白馬に乗っていなくても、茶色でもぶち模様でも構わない。いっそ王子という条件だって緩和しないこともない。

「だから誰でもいいから神様仏様閻魔様、私を借金取りのいないところに連れて行ってください～！！！」

そんな心の底からの叫びに、誰かが答えた。

「助けてあげるから、あの路地に飛び込むんだ」

それが誰の声だとか、そもそも走っているアヤの耳元で聞こえているのは何故だとか。そのようなことは今は些細な問題であった。

「とうっ！」

切羽詰まっていたアヤは何も疑わず声に言われた通りに、見えていた細い路地に飛び込んだ。

と、同時に。

パァァッ！

アヤのいる辺りが光った。夜の闇に慣れた目にはまぶしい輝きであった。

「ちょっ、何！？」

アヤは思わず目をつぶった。

「あの娘、どこに行きやがった！」

「確かにここに入ったはずだ！」

借金取りたちが見た路地には、汚いゴミ箱が転がっているだけで、アヤの姿はどこにもなかった。

2話　アヤ、パンダに会う

まぶしい光が消えたので、アヤはゆっくりと目を開けた。
「あれ？」
アヤがいたのは、繁華街のアスファルト道路の上であるはずだった。路地に飛び込めと言われたから飛び込んだ。なのに今、アヤがいる場所は。
「なんで木がいっぱい？なんで土？」
うっそうと木が茂ったところであった。
「え？え？」
夜なので、周囲の景色が全く見えない。外灯の類が全くないのだ。あわてて後ろを振り返るも、今までアヤがいた場所の明かりなどない。真っ暗闇である。
「なに、なんなの、どうしたのよぉ」
状況についていけず、アヤはその場にへたり込んだ。スカート越しに、地面の湿った感触が伝わってくる。その感触が気持ち悪くて、反射的に涙が滲んできた。
「うー、私が何したって言うのよぉ」
逃げることを止めてしまうと、今までさんざん借金取りに追いかけられた恐怖が今更に襲ってくる。一度零れ落ちた涙をきっかけに、アヤはしばしその場で号泣した。

どのくらい泣いたか分からない。しかし、泣いてばかりもいられないのが人間だ。
「おなか空いた・・・」
バイトを終えて家に帰る途中であったので、アヤは何も食べていなかった。いつもならばバイト先で食事をごちそうになって帰るのだが、今日は給料日だったため、家に帰って自分で作ろうと思ったの

だ。
「あ、そうだ」
そこで、アヤは手に持っていたクリームコロッケの存在を思い出す。すっかり冷めてしまったであろうが、食べ物には違いない。
「うん、これ食べて、ここがどこだかを考えよう」
それから近くの警察にでも駆け込んで、家に帰してもらえばいい。そう考えると元気が湧いてきた気がする。アヤはいそいそとクリームコロッケを袋から出した。冷めたせいで、少々しっとりしていた。
「いただきます！」
クリームコロッケを食べようとした、まさにその時。
ガサッ、ガサガサッ・・・
周囲から、何かが草を踏む音がした。アヤはそちらを警戒して、立ち上がった。
「まさか、あいつら！？」
借金取りが追いかけてきたのだろうか。ということはあの繁華街からあまり離れていないのかもしれない。
「逃げる！？ていうかどっちに！？ああでもコロッケ食べなきゃ！」
異常な状況に、アヤはパニックを起こしていた。
ガサガサッ！
大きな音がして、何かが姿を現した。
「きゃーーー！」
大音響でアヤは叫んだ。
叫んで叫んで。
息切れを起こした。
そして相手が襲ってこない様子に、恐る恐る目を凝らしてそちらを見た。
はたしてそこにいたのは。
「・・・パンダ？」
「ガル」
パンダであった。あの独特の模様は見紛うはずもない。だが、アヤ

の知っているパンダと違う点をあえて挙げるならば。
「何故にショッキングピンク？」
夜の闇にまぶしいショッキングピンク模様のパンダであった。目を凝らして見つめていたので、目がちかちかしてきた。しかも、よくよく見ると背中にちいさな羽が生えている。その羽はアヤの手のひらサイズ。とてもパンダを飛ばすことができるとは思えないサイズだ。だからといって身体の大きさに見合った羽の方がいいかというと、微妙である。いやいや、違うだろう、問題はそこでもなくて。何故にパンダに羽？
　混乱の上にさらに混乱しているアヤに、パンダ（仮）はのそのそと近寄ってくる。そして、アヤが手に持っているクリームコロッケをじーっと見つめる。口元からはよだれらしきものが糸をひいていた。
「・・・ひょっとして、欲しいとか」
「ガル！」
返事をするように鳴くパンダ（仮）。パンダが食べるのは笹だろうから草食だろう。だったらそこらの草でも食べていろ。あ、でもクマは雑食だからこんなのも食べるのだろうか。でもこれはどちらでもない、パンダ（仮）である。
「・・・お腹壊しても、自己責任だからね」
結局アヤは、パンダ（仮）の物欲しそうな視線に負けた。

3話　アヤ、とりあえず人間をさがす

人間は混乱する状況が立て続けに起こると、ぐるっと一周して正常になるらしい。

パンダにクリームコロッケを横取りされて、アヤは決定的に食料が足りない事実に行き当たった。まだ育ち盛りで、いろいろと成長する予定である高校二年生。おかずだけではダメなのだ。主食が食べたい。米が食べたい！

「よし、ここがどこだか知らないけれど、道路に出ればコンビニくらいあるわよね」

とりあえず人間を探して救助を求めるのが先決である。コンビニで場所を尋ねて、遠ければタクシーか電車で家に帰ればいい。いらぬ出費は痛いけれど、ここでパンダ（仮）といてもどうにもならない。

そうと心を決めれば、アヤは立ち上がって荷物を持った。荷物といっても学校指定の通学バッグだけだが。暗闇に目が慣れてきたこともあり、月明かりで周囲の景色がぼんやりとわかってきた。とりあえず車の走行音らしきものはしない。道路から相当離れているのだろうか。

人里離れた山で遭難＝白骨死体、という方程式が脳裏を過ぎった。

「いやいや、車が通らないド田舎ってこともあるしね！あんがいすぐそこに民家があったりするのよ、こういう場合！」

と、アヤは己の思考回路をを良い方に導こうとあがく。そして勢いにまかせて、ざっくざっくと木々が茂る土の上を進んでいく。道などはなく、草に分け入って進むアヤのセーラー服のスカートには葉っぱがたくさんくっついていた。

そして何故か、パンダ（仮）が後ろからついてきていた。

「なんでアンタはついてくるの？」

「ガル！」

しまった、ひょっとして餌付けをしてしまったのかもしれない。

このままこの、ショッキングピック模様のパンダ（仮）を人里まで引き連れて歩くということに、アヤは危機感をおぼえた。どこかでこのパンダ（仮）を撒かねばならない。しかし、このような野趣あふる場所柄で、野生動物（だろう多分）に人間が果たして勝ち得るのか。アヤが脳内でシュミレーションをしていると、なんとも間が悪いことにあかりが見えてきた。

「トンネルを抜けるとそこはお城だった」
いやトンネル無かったけれども、森っぽいところを突っ切ってきただけだけれども。
「なぜにお城？」
しかも名古屋城とかの鯱の乗った瓦葺の日本建築ではなく、石造りの重苦しい西洋建築である。しかもシンデレラ系ではなく、どちらかというとドラキュラ系っぽいカンジだ。
松明の火が盛大に焚かれているあたりは、ひょっとして門というところでしょうか。人が二人立っていたので、とりあえず人間を発見できたことはミッションクリアとしてもよいだろう。しかし、ここで新たな問題発生。あの二人、何だか重そうな服着てますけど。
「なぜに鎧兜？」
フルフェイスというやつか、バイクのヘルメットよりももっと通気性が悪くて蒸れそうで、何より重そうである。身体を覆う方は言うに及ばず。あのまま動けるのか？それとも立っているだけの仕事だからあえてアレなのか。あの格好で怪しい奴を追えといわれても、無理だと答えるしかないだろう。この場合、怪しい奴というのはアヤとパンダ（仮）のことを指すのであろうが。
さて、お目当ての道を尋ねる人間を発見したところで次のミッションに入らねばならない。あの二人に声をかけるのだ。しかし、アヤはしばしためらい、考える。そうして結論を出す。
「・・・違う家を探すのもアリよね、そうよね」

そもそも、ここはアヤが目的としていた民家などではない。もっとこじんまりとした、人間二人か三人くらいが暮らしている空間を探していたのだ。決してドラキュラ城を探していたわけではなく。

「場所を移動しましょう。やり直しもアリということで」

「ガル」

パンダ（仮）を引き連れて、アヤは再び森に入っていくのであった。

4話　アヤ、門前払いされる

もう一度森に入って行ったはいいものの、アヤとパンダ（仮）は森の中で迷子になった。
「ああもう、どっちに行けばいいかわかんなくなったじゃない！」
アヤが夜の森で移動しようとしたことが悪いのか、はたまたパンダ（仮）を道案内にしようとしたことが悪いのか。パンダ（仮）はのん気そうにあくびなんぞしている。
　ああ面倒臭いからもうパンダでいい。パンダ（仮）の名前は今からパンダだ。アヤ命名でショッキングピンクなパンダ柄の生き物は、名前がパンダになった。
「もうお腹すいた疲れた眠たい」
森の木々にさえぎられているが、かすかな月明かりで探す月の姿はもう空の中ほどにのぼっているようである。今夜はもうこれ以上動かない方がいいのだろうか。
「けどそうなると、野宿なのね・・・」
いまどきの女子高生が野宿。公園でとかではなく、リアル野宿。しかもロクに装備などありはしない。
　いや、一つだけあった。暖をとるのにうってつけの装備が。
「ガル？」
アヤにじっと見つめられているパンダが、不思議そうに首を傾げる。
「パンダ、ちょっとそこに横になりなさい」
「ガル」
言葉が通じたのか偶然か、パンダはごろんとその場に転がった。だらんと四足を投げ出すその姿は、猟師にトドメをさされたクマのようであった。
「よし、天然の毛布確保」
アヤはパンダの毛皮にしがみつき、寝心地の良いポイントを探る。
「おやすみ」

パンダに一応声をかけて、アヤは目を閉じる。
そういえば父親が死んでから、アヤは誰かと一緒に寝るのは初めてである。この場合は「誰か」ではなく「何か」であろうが。
他生物の温もりは存外心地よく、アヤはおやすみ三秒で眠りに落ちたのであった。

日の出と共に、アヤは猛烈な空腹感に襲われて起きた。アヤが起きてもパンダはまだ寝ていた。のん気に寝息を立てて寝ているパンダをじっと見ていると、肉の丸焼きに見えてきた。かなりの重症である。パンダにとって幸運なことは、パンダを捌くための刃物の類を、アヤが持っていなかったことであろう。刃物と名の付くもので通学バッグに入っているのはカッターナイフだけである。さすがにカッターナイフでパンダを捌けない。
そう、アヤは借金取りから追われて逃げている最中でも、通学バッグを手放さなかったのだ。何せ昨日もらった給料含め、アヤの全財産が入っているのだから。
そんな己の身の危機が迫っているとは微塵も思わないのか、野生失格なのん気なパンダが起きたのは、太陽が程よく昇った頃であった。
「今日こそは森を抜けて、誰かに道を尋ねるんだからね！」
富士の樹海で遭難の末白骨化、というニュースがアヤの頭をよぎる。いやいや、富士の樹海にパンダがいるなんてこと聞いたことがないし、とアヤは頭を激しく振って己の考えを消し去った。
「パンダ、あんたも気合い入れないと、朝ごはんが手に入らないんだからね！」
「ガル！」
パンダの返事は勇ましいが、昨夜のこともありいまいち信用に欠ける。それでも、動物の嗅覚に頼らないと食事にありつくのは難しいだろう。

「さあ行くのよパンダ！」
大丈夫なのか本当に、と不安を抱きながらもパンダの後をついていくアヤなのであった。

結論を言うと、パンダは見事森を抜けた。それも昨夜のあの城門ではなく、違う場所に出たのだ。
「えらいパンダ！」
「ガル！」
アヤとパンダがたどり着いたのは昨夜の城門よりももっと大きい門であり、そこから垣間見える景色は街並みであるらしかった。その街並みのはるか向こうにドラキュラ城が見えた気がするがそこは気付かなかったフリをしたい。雰囲気としては、日本にある夢の国の入り口というよりは、ＲＰＧゲームのお城の入り口に近いかもしれない。どちらにしても言いたいことは、現実離れしているということである。
しかし今は、自分は一体どこへ来てしまったのだろうかという謎はスルーする。疑問に思うことは多々あるが、今はそれより食事が先である。腹が減っては戦はできないのだ。
その門も、昨夜の城門と同じく人間が立っていた。しかし昨夜の人間と違って鎧兜ではない。普通の衣服の上に、皮っぽいものを身につけている。なんだその格好、現代日本で見たことないぞなんてことは今は気にしない！っていうか考えない方がいい！！とりあえず朝ごはんだ！！
アヤは門を通って街に入ろうとする。
しかし。
「ちょっとキミ、登録証を見せて」
門に立っていた人間の男性に呼び止められた。何だ登録証というのは、とアヤは首を傾げる。横でパンダも釣られて首を傾げていた。
そんなアヤの様子を怪しんだその男性は、じろりとアヤを眺めま

わした。
「登録証がないと入れないな」
冷たくそういうと、しっしっと手を振って追い返された。
修学旅行で行った京都のお寺でも、お金を要求されても登録証なんぞと言われたことはない。払うお金などないアヤは、寺院見学ができなかったというほろ苦い思い出だ。それに、ＲＰＧゲームなどで言う門というものは全ての人に分け隔てなく開かれているものではないのか。あまつさえ大事に置いてある宝箱の中身すらくれるという心の広さを見習え！ＲＰＧぽいと思ったのは見掛けだけか！
アヤがそんなことを心の中で愚痴ってみても、門の中には入れてもらえないのであった。

5話　アヤ、美少年に会う

「お腹空いたねぇ、パンダ」
「ガルゥ」
一人と一匹は、先程の門番の男がいる場所から少々離れた壁にもたれて座り込んでいる。街が背中の壁のすぐ後ろにあるのに入れないなんて。世の中は何て冷たく出来ているのだろうか。
　それでも、そもそもアヤの目的は街に入ることではない。道を尋ねて、最寄のコンビニを聞きたかったのだ。だから門番の男にも尋ねたのだ。
「ここから最寄のコンビニにはどう行けばいいですか」
それに門番の男は答えた。
「コンビニなんて町は知らんな。どこの田舎から来たんだお前」
コンビニを知らないとは、そっちこそ田舎者ではないか！と激怒したアヤを、パンダがここまで引っ張ってきたわけであるのだが。パンダにフォローされるなんて、人間としてどうだろうか。
　しかし壁を背にして座り込み、空を見上げていると、アヤが今まであえて考えないようにしていた疑問が心の内に湧き上がってくる。
「ねえパンダ、ここってどこかなぁ？」
周囲には電線も、アスファルトも、車も見えない。アヤの目の前に広がっているのは、土がむき出しになっている道路と、こんもりとした森である。少なくともアヤに見渡せる範囲は全て森である。この森を半日で脱出できて良かった、と心底アヤは思った。本気で白骨死体の危機だったのである。
　それはともかくとして、日本国内でも探せばこういう田舎があるのかもしれないが、少なくとも昨夜、あの光に包まれる直前までアヤがいたのは都会だったはずだ。今アヤが背にしているような、レンガ造りの壁なんてなかったはずだ。アヤが知っているレンガな建造物といえば、赤レンガ倉庫くらいのものである。

しかし、だとしたらここはどこだと言うのだろうか？
「ここって日本じゃないのかなぁ」
少なくとも、ニホンであんなドラキュラ城があったら有名になっているはずである。しかしアヤはそんなものの噂を聞いたことがない。
「わけわかんないどこよここお腹減ったよぉ！」
台詞の最後は心の叫びであった。
そうだ、お腹が空いているからロクな事を考えないのだ。何と言っても昨夜から口にしたものは冷めたクリームコロッケのみである。しかも半分をパンダに強奪された。アヤはどんなに貧乏でも朝ごはんはがっつり食べる派だ。朝ごはんを抜いているから調子が出ないのだ。そうに違いない。
「中に入れなくってもいいから、ご飯を要求してみよう！」
哀れな女子高生が目の前で餓死しかけているのを、放っておくほどあの門番も悪人でないだろう。
多分。
そう決意してアヤが立ち上がろうとすると、背後から声を掛けられた。
「おねえさんはニホンって街からきたの？」
アヤはギョッとして振り返る。
パンダしかいないと思っていたからこそ、大きな声で独り言を言っていたのだ。誰かがずっといたとしたら恥ずかしすぎる。
アヤは足を投げ出し壁に寄りかかって座っていた姿勢から、慌てて立ち上がる。
「おねーさんは怪しい人じゃないのよ、ちょっとばかりお腹が空いていただけで」
少々引きつり気味なにっこり笑顔で声のした方を振り向けば、そこには金髪美少年がいた。
背はアヤよりも頭一つぶん低いだろうか。滑らかな白い肌にバラ色の頬、艶やかな唇に天使の輪が輝いている黄金の髪。それにくっきり二重まぶたな青い目。それらが絶妙なバランスで配置されてい

る、まごうことなき美少年であった。
　美少年が首を傾げて尋ねる。
「おねえさんお腹空いているの？」
「いやぁ空いているっていうかなんていうか」
美少年に己の腹具合を聞かれるのはものすごく恥ずかしい。初対面の美少年に、腹へらしの怪しい女認定を受けたくはない。アヤだって年頃の乙女、カッコつけたいことだってあるのだ。
　しかし、アヤの恥ずかしさなど理解できるはずのないパンダが、隣で盛大に腹の虫を鳴らしてくれた。
「パンダ、あんた私のクリームコロッケを強奪した分際で、空腹を訴えようっていうの？」
むしろ野生だったら食料くらい己で狩ってこい。やっぱりあの時何とかして捌いて食べていればよかったとかアヤが考えていると、不穏な思考を察知したのか、パンダが警戒するようにこちらを見る。
　アヤとパンダが無言のにらみ合いをしていると。
「おねえさん、このヴァーニャはおねえさんが連れているの？」
美少年が珍しげにパンダを見ている。確かにショッキングピンクの羽つきパンダは珍しかろうが。それにしても聞きなれない固有名詞を聞いた。
「ヴァーニャって何？」
問い返したアヤに、美少年は驚いたようだ。
「ヴァーニャを知らないの？その聖獣のことだよ」
ヴァーニャ、響きがなにやらパンダに似ている。パンダのパチモンっぽい名前である。しかも美少年はおかしなことを言っている。
　聖獣、聖なる獣って意味で合ってますか？これが？この毒々しいショッキングピンクが？
「パンダのくせに聖なる獣！？」
何より腹が立つのが、パンダが「どや顔」して胸を張って精一杯偉そうな態度をしてみせていることである。パンダのくせにパンダのくせに！

「聖獣を連れて歩くなら、登録証を持っていないと街に入れないよ」
しかしここで、美少年が先程の門番とのやり取りの謎を解いてくれた。登録証というのは、つまりはパンダの血統書のようなものであるらしい。そんなもの、森で勝手に着いてきたパンダの身の上なんぞアヤが知るわけがない。
「パンダはさっき森の中で偶然ひっかけただけだし」
「へえ、群れとはぐれて迷子になったのかな。だったら神殿で登録証を作ってもらわなきゃ」
もっと小さな街ならば、登録証がなくても入れるという。しかし今から違う街へ行けというのか。腹ヘリでへばっているこの状況で。パンダごときのために。
　そんなアヤの心の声を聞いたのか、美少年は少し考えるように空を見上げ、しばらく悩むそぶりをみせた。そしてしばらくすると「よし」と頷いた。
「おねえさんこっち。中へ入れるところがあるから」
美少年はそう言って、アヤに手招きしつつ門番から遠ざかっていく。
　美少年に言われるままについていくと、門番がいた場所からだいぶ離れた壁の一部が壊れていた。その壊れた壁の一部を塞ぐように、大きめの石がいくつか積み上げられている。美少年はその石を動かし始めた。
「おねえさんも手伝って」
美少年が石を動かすのをアヤも手伝う。しばらくすると、美少年が余裕で通れるくらいの穴が開いた。アヤだと辛うじて通れるだろうか。
「ここから入るといいよ」
美少年が先に入っていって、壁の向こうから手招きをしている。アヤも匍匐全身の要領で、その穴を通り抜ける。だが問題は。
「パンダ、あんた通る？」
「ガルゥ」
結局、もう一度壁の外に出たアヤがパンダのお尻を押し、壁の中か

ら美少年に引っ張られ、毛皮を土まみれにしながらようやく、パンダは壁を通ったのであった。

6話　アヤ、公共物を破壊する

美少年に壁の内側に入れてもらったアヤは、美少年に食べ物を食べられる場所を教えてもらった。

そういうわけで、今アヤはパンダを連れて市場をブラブラしていた。ちなみに美少年とは市場に来る前に別れている。なにやら用事があるようであった。

「わぁー、看板が読めない」

アヤは市場を眺めていてすぐに異変に気付いた。不思議なことに人々が交わす言葉は分かるのに、看板などに書いてある文字がさっぱり分からないのだ。日本語ではないし、英語などのアルファベット表記ではない。見た目としてはアラビア語っぽいカンジである。アヤがアラビア語を知っているというわけではないが、たまにテレビで見るアラビアのニュースで見る文字を思い出してのことであった。

だがしかし、そういった謎はひとまず置いておくことにして、今は何を置いてもご飯である。とにかくお腹が空きすぎて倒れそうなのである。いろいろもろもろの謎の類は腹を満たした後でゆっくりじっくり考えればいいのだ。まずはご飯！ギブミー朝食（もう昼をとっくに過ぎているが）！

すれ違う人たちがホットドックのような食べ物を持っているのを目ざとくチェックしたアヤは、それを売っている店を見つけた。露天なのだが、お客さんが並んでいるので、なかなかの人気店なのだろう。アヤも並んでいる列に加わる。パンダを連れているので少々通りの邪魔なのはアヤのせいではないと思う。

「おじさん一つちょうだい」

アヤが注文すると、背中をグイグイと押される。振り向けば、パンダがよだれをたらしていた。よだれを服につけていないだろうかと心配になる。

「・・・二つください」

しょうがないので、パンダの分も注文してやる。
　二つのホットドッグもどきを差し出され、カバンから財布を出して、アヤは中身がおかしいことに気付く。
「なにこれ」
重たげな金貨や銀貨ががま口財布に詰まっていたのだ。アヤが憶えている限り、このがま口財布には折りたたまれた千円札が一枚に百円硬貨が三枚、これだけが入っていたはずだ。なのになんなのだこの金貨と銀貨は。
「ちょっとぉ、早くしてよ」
後ろに並んでいる女性から急かされ、アヤはとりあえず銀貨を一枚出してみた。するとお釣りで銅貨が八枚返ってきた。それほど大きくないがま口財布は許容オーバー気味でパンパンになった。

アヤはまた増えてしまった謎に首をかしげつつも、市場から噴水のある開けた広場に移動してきた。噴水はどういう原理なのか、空中に浮かんだ球体から水が吹き出ていて、その水が下に作られている人工の池に注がれている。何かで球体を空中に吊り上げているようでもない。不思議な噴水である。
　その噴水の近くのベンチに座り、パンダと共にホットドックもどきを食べることにした。ちなみにあの後飲み物も購入していた。容器に入れられた液体は色は薄いピンクなのだが、飲んだらブドウの味がした。さわやかな後味で朝食にぴったりであろう。しばし一人と一匹はもぐもぐと食事するのに集中していた。パンダと一緒にベンチでホットドックもどきを食べているアヤを通りかかる人がガン見していくのだが、食事に集中しているアヤは気付かない。パンダも物をつかむのに向いていない前足を使って、器用にホットドックもどきを食べている。
　そうやって無言で食べることしばし。
「あー、食べたぁ」

「ガル！」
満腹とはいかないが、穀類を胃に入れたことによる満足感は大きい。欲を言えば、アヤは朝食は米派なのだが、この際贅沢は言うまい。
「食事は日々の生活の基本よね、うん」
食事をしたことによって、脳にも栄養がまわってきて気持ちに余裕が出てきたアヤは、改めて周囲を見渡した。赤っぽいレンガの屋根に、石畳の道。壁の外とは違って、壁の内側の街には道路に石畳が敷き詰めてあった。それでも、アスファルトではないことに違和感を感じる。道行く人々の格好も、なんだが昔見た古い映画の登場人物が着ていたような服装である。こういった違和感を、あえて一言で表すならば「ファンタジーっぽい」のだ。現代日本で同じ場所を探すならば、かの有名な夢の国とかのテーマパークがあるのだが、目を皿のようにしてみても、観覧車などのアトラクションの類が見当たらない。それに、ここにはテーマパークにはない生活の匂いがする。洗濯物とか、油とか、動物とかの雑多な匂いだ。空気清浄の効いたテーマパークにはないものだ。
「私は一体、どこに来ちゃったんだろうねぇ」
ベンチにもたれかかり、空を見上げる。抜けるような青空だ。空を見上げるなんてことをしたのは何年ぶりだろうか。記憶にある空よりも、青みが強い気がする。空気が澄んでいると空も青くなると聞いたことがある。
　空から視線を下ろせば、噴水が視界に入った。空中に浮かんでいる球体は金属には見えず、透き通っている物体のようである。ガラスであるにしても、どうやって水が出ているのだろうか。手品の要領で、宙に浮いているように見せてもちゃんと水道管の通った土台があるとか。何にせよ不思議な噴水である。
「そういえば、私顔を洗っていない」
というよりも、風呂にも入らず寝て起きてそのままである。しかも野宿。そして目の前には水。
　あれだけ水が流れ出ているのだから、あの水で顔を洗うくらいや

ってもいいだろうか。考え出したら顔を洗いたくて仕方がなくなってきた。ちょっと水遊びしているように見せかけてばしゃっと顔を洗うくらい許される気がする。公園の水場ではよくある光景ではないか。旅の恥はかき捨てだ！

「むしろパンダ、あんたちょっとあの噴水に飛び込んできなさいよ」

そうすればパンダ救出という水に近付く大義名分がたつというものだ。しかしパンダは嫌そうに顔を背ける。朝食を奢ってやったのに、その態度は何だ！

仕方がないので、アヤは極力自然に見えるように堂々とした足取りで噴水に近付く。挙動不審者にならないようにするのがポイントだ。そうして、噴水の水を手に取る。ちょっとひんやりする程度の冷たさで、心地よい水温である。アヤはそれをパシャッと顔にかける。顔が引き締まるカンジが、ああ朝だという気持ちにさせる（くどいようだがもう昼だ）。

「あ、しまったタオル」

たしかバッグの中に入っていたはずだ、とアヤがベンチに戻ろうとしたとき。

バチバチバチッ！

アヤの頭上で音がした。何事かと濡れたままの顔を上げれば、水を出していた球体が煙を出していた。

「へ？」

そして、宙に浮いていた球体は、突然重力を思い出したように下に落ちる。噴水の水を湛えていた池に落下し、当然そばにいたアヤには思いっきり水がかかった。

「きゃあ、噴水が！」

「突然壊れたぞ！」

「どうなっているんだ！？」

・・・ひょっとして、自分のせいだろうか？

7話　アヤ、怪しい集団に捕まる

聖獣ヴァーニャを連れた不審な娘が門を通ろうとした、という報告がされたのは、昼を少し過ぎた頃であった。その報告がなされたとき、赤騎士隊の隊長アラン・マキアスは昼食の途中であった。

「ほんで？身元は？」

咀嚼していた肉を飲み込み、質問するアラン。

「いや、登録証をもっていなかったので、門番が追い返したらしく」

知りませんと返してきた、報告にきた若い騎士にアランは眉根を寄せる。

「バッカ野郎、不審だと思ったならとりあえず捕まえとけよ！」

怒られるとは思っていなかったのか、騎士はびくりと身体をすくませる。

「しかし、理由もなく民間人を捕らえるわけには」

「別に拘束具で捕まえなくても、休憩室でお茶させとけばいいだろうがよ！」

気の利かない現場のやり方に、アランは苛立ちを見せる。

「ヴァーニャは高額で取引される、最高位の聖獣だぞ。密輸品だったりしたらどうする！」

アランは昼食の残りを流し込むようにして食べる。せっかくの食事が、これでは味もわからない。アランはため息をつくと、胃を落ち着かせるためにお茶を飲んで立ち上がった。

「こんなことがサラディンに知れてみろ、イヤミを言われるに決まってる」

おお嫌だ、と呟くと、アランは壁にかかっていたマントを羽織って部屋を出た。

　その聖獣を連れていた娘というのが、遠くに行っていないことを願って。

噴水が壊れてしまってから、アヤは呆然としていた。しかしパンダが頭突きをしてくるので、はっと我にかえる。噴水が壊れたのは自分のせいだろうか？噴水で顔をあらったりしてはいけなかったのか？いいや、これは偶然だ。そうだろう、ちょっと顔を洗ったくらいで壊れる噴水って何だ。そうだ、自分は悪くない。しかしここにいるのもマズい気がする。可及的速やかにここから立ち退くべきだろう。

アヤがそう思い立ったのは、しかし時すでに遅かった。赤い服を着た目立つ集団が、アヤを指差してなにやら騒いでいた。

「何あの派手な集団は？」

「ガル？」

アヤの問いかけのような独り言に、パンダが首を傾げる。いや、別にパンダに答えを求めているわけではないのだが。一人暮らしがペットを飼うと、ペットと会話をするようになると聞いたことがある。これがまさしくその現象なのだろうか。パンダは勝手についてきただけで、ペットなわけではないのだが。

アヤが脳内で一人ツッコミをしている間にも、赤い服の集団はアヤのすぐ近くまでやってきた。「赤騎士隊だ」と周囲の人間が噂しているのがアヤの耳に入る。赤い服を着ているから赤騎士隊なのだろうか。なんとも微妙なネーミングである。

その赤騎士隊の集団の中から、男性が一人アヤの前に進み出て来た。三十代前後くらいの年齢であろう、明るい茶色の髪と眼の、なかなかハンサムな顔立ちをしていた。

「聖獣ヴァーニャを連れた娘は門で追い返されたと聞いたのだが、どうして街中にいるんだ？」

聖獣ヴァーニャとはパンダのことであろう。するとその娘というのは必然的にアヤのことになる。どうしてと問われても、美少年に入れてもらったのだ。しかしあの入り口は明らかに秘密の出入り口っぽいものだったので、ここで教えてしまってはあの美少年に恩をあ

だで返すような形になってしまう。アヤが何と言い訳しようかと考えていると、その男性はどうやらアヤに聞いていたわけではないらしい。
「隊長、これはその」
言い訳をしようとした集団の一人を、男性はジロリと睨む。
「職務怠慢だな。同じ班の奴らで夜間特別訓練な」
隊長であるらしいその男性に叱られたようである。後ろの赤い集団の一部が意気消沈している。
　そんな様子を、ただボーッと見ていたアヤとパンダは、隊長の視線がこちらに向けられたときに、もしかして今の間に逃げていればよかったのではないかと気付いた。しかし時すでに遅し。
「さていつの間にどこから侵入したのか知らんが、正門に現れた聖獣連れの娘はお前だな。というかヴァーニャを連れた娘がそう何人もいてたまるか」
隊長の口ぶりからすると、パンダはやはり珍獣の類であるらしい。そんな珍獣を連れて市場をうろうろしていれば、すぐに見つかるのも道理であろう。
「だって、わけのわからない理屈を言われて追い返されたのよ。こっちが困っていることを聞きもしなかったそっちだって悪いと思うけど？」
好きで不法侵入したのではなく、そちらにだって手落ちがあったのだ。この理屈をごり押しするに限る。こういう場合一旦非を認めると、なし崩しにあることないこと罪を着せられるのだから。アヤは伊達に貧乏借金生活をしていたわけではない、この手の対処は心得ていた。言質をとられた方が負けなのだ。
　一方、赤騎士隊と遭遇してから一言も喋らなかったアヤが反抗的な台詞を言ったことに、隊長は驚いたらしい。一瞬目を丸くしていたが、すぐにニヤリとした笑みを浮かべた。
「それはそれは、部下が失礼をしたようで。ところでお嬢ちゃん、この噴水を壊したのはあんただと街の者らが言っているのだがな」

しまった一瞬忘れていた。不法侵入と公共物破損。どちらの罪が重いだろうか。
「いやいや、そもそも噴水壊れたのは私のせいじゃないから」
危うく雰囲気に呑まれて罪を認めるところであった。あぶない、己を強くもっていなければ。
「なにやら言い分があるようだ。詳しくは詰め所で聞こう」
そう言って隊長が意味ありげに視線を逸らすので、つられてアヤもそちらを見る。するとパンダが赤い集団に縄で捕獲されていた。グルグルと情けない唸り声を上げてアヤに助けを求めているようであった。
「パンダあんたなに捕まっているのよ！？」
アヤが隊長との遣り取りに集中している間に、パンダはうっかり捕まっていたらしい。いや待て、パンダは勝手についてきただけだ。パンダが捕まったからといって何か束縛を受けなければならないのだろうか。
　そんなアヤの思考を読んだのかは知らないが。
「ちなみに、登録証のないヴァーニャを連れていることも罰の対象になることもある」
「連れているんじゃなくて、勝手についてきているだけなんだけど」
「ヴァーニャに食事を与えていたという証言もある」
「・・・たかられただけだし」
「グルゥ・・・」
パンダが情けない顔をしてアヤを見る。凛々しい顔なパンダというのも想像つかないが。
　思えば、森で会ったときにクリームコロッケを与えなければよかった。アヤはそこから既に選択肢を選び間違えていた気がする。
「・・・詰め所って、お茶くらい出るんでしょうね」
こうして、アヤは結局赤騎士隊に連れて行かれることになったのである。

8話　アヤ、責任者の前に連行される

詰め所って言うから交番みたいな場所だと思っていたのに。
　どうして自分は、ドラキュラ城の中にいるのであろうか？
「いやだー！私はドラキュラには用は無い！」
「ドラキュラとやらが誰かは知らないが、噴水を壊した者を連れてくるように魔法省から言われているんだ」
意味不明な言葉が出たが、城なんぞに入ってアヤが得することは何もない。城にいるのは、お殿様だと昔から決まっているのだ。ＲＰＧでは魔王城にいるのはラスボスだ。ドラキュラ城はどちらかというとラスボスの方であろう。
　アヤが城の入り口付近でゴネて踏ん張って、これ以上先に行かないぞという意思表示をしていると、面倒臭くなったらしい隊長がアヤを担ぎ上げた。いわゆる俵担ぎである。アヤの頭が隊長の背中に当たる体勢である。
「うぎゃあ！ちょっと降ろしなさいよ！頭に血がのぼる！」
「やかましい、こっちだって忙しいんだ」
そう言って隊長にぴしゃりとお尻を叩かれた。お尻を触られた、セクハラだ！
「エッチスケベ変態！スカートをめくるな！」
隊長がひらひらと揺れるフレアスカートをいじっている。
「こんなめくりやすい長さの服を着ているお前が悪い」
「これは女子高生のセーラー服にとっての適正な長さよ！」
体勢が悪いのと興奮しているのとで、余計に頭に血がのぼる。鼻血が出たらどうしてくれるのだ。
「痴漢がいるー！」
「人聞きの悪いことを大声でわめくな！ガキのくせしてマセてやがる」
確かに、アヤは背も高い方ではないし顔立ちも大人びているとは言

いがたいし、体型だって大人体型ではない（童顔の幼児体型なわけではないええ決して）。しかし、だからと言って十七歳の女子高生に対してガキとは何だ！こちとら日々労働して生活費を稼いでいる労働者だ！

抗議の意味で両膝を使ってガンガン隊長の上半身に膝蹴りを入れる。「痛ぇんだよ！」とまたお尻を叩かれた。二回目！

そんなこんなで、ぎゃぁぎゃぁ騒いでいると、隊長さんが急にぴたっと足を止めた。やっと降ろしてくれる気になったのかと思えば。

「うるさいぞ、廊下で何を騒いでいる」

心地よいテノールの声がした。アヤには見えないが、前方に誰かいるらしい。というより、今までだって周囲を行き交う人間は大勢いた。その誰もが隊長とアヤを呼び止めたり咎めたりしなかった。それが、初めて呼び止められた。というか隊長が勝手に止まった。

「閣下、お騒がせして申し訳ありません」

閣下とな。そのような呼ばれ方をする人間に、アヤは人生で初めて会った。

「ひょっとしてソレが、魔法省が騒いでいた噴水を壊したという者か」

「さようでございます。反抗するのでこうして運んでいるところです」

「なによー、壊してないってば！噴水で顔洗っていたら勝手に球が煙ふいて落っこちたんだってば！」

通りすがりの見知らぬ偉い人に、ナチュラルに犯罪者認定されたくない。事実の訂正は口に出すのが大事なのだ。

「きっとあの噴水がもともと壊れてたのよ！それか不良品よ！」

「ほぉう？」

テノールの声が幾分か低くなる。アヤはそちらにお尻を向けていることになるので顔が分からないが、妙に背筋がゾクッとくる、色気のある声である。けれども今は、色気だけの要素ではなく鳥肌が立った。マズい、何か地雷を踏んだのか？

「バッカやろ・・・」
隊長が低く呻く。何だ何だ、いかんせん対象にお尻を向けているので、アヤの空気を読む能力も半減する。いいから降ろせ、さっさと降ろせ！
「あの噴水の魔法構築式は私の作ったものだが、それが不良であったというのだなこのデカ尻娘は」
「・・・なんですってぇ？」
お尻が人よりちょっぴり豊満（繰り返すが幼児体型ではない）であることは、アヤのコンプレックスである。それをはっきりと言葉で貶されたとあっては、乙女として黙っていられない。こちらだって好きでお尻を向けているわけではないのだ。
「アンタが誰だか知らないけどね！自分のヘボさを他人のせいにするんじゃないわよこのハゲ！」
相手がハゲているかどうかは未確認だが、目には目を作戦である。
しかし、アヤを担いでいる隊長からまたしてもお尻を叩かれた。太鼓ではないのだから、乙女のお尻を気軽に叩かないでもらいたい。
「バカかお前は！？お前の前にいるのはこの国の宰相閣下だぞ！」
宰相閣下って、ひょっとして偉い人間なのか？

ちなみに。その頃パンダはどうしているかというと。
「聖獣ヴァーニャって、風呂が好きだったんだな」
「聖獣とはいえ獣だし、水を嫌うと思うんだけどな」
「ガル～♪」
有難い聖獣としてもてなしを受けて、まったり風呂に浸かっていた。
風呂の中でデザートの果物まで食べて、ご機嫌であった。

8話　アヤ、責任者の前に連行される（後書き）

注意：他人の身体的特徴を挙げて悪く言うのは最低の行為です。良い子のみなさんは閣下たちのマネをしないようにね！

9話　アヤ、借金を負う

そんなこんなで宰相閣下の怒りを買ったアヤは、当初の魔法省とやらではなく宰相閣下直々に取調べを受けることになった。
　ようやく俵担ぎから開放されたアヤが見た宰相閣下は・・・ハゲてはいなかった。
　年齢は隊長と同じくらいだろうか、アヤが少々見上げるくらいの身長にすらりとした細身の体型、肩の少し下くらいまで伸ばされた輝く銀髪はゆるく後ろでまとめられている。シミ一つない白い肌は美白に命を賭けている世のお嬢さん方に喧嘩を売っているようである。目鼻立ちも整っているが、今は灰色の目がアヤを険しく睨んでいる。
　うん、分かりやすい表現で言えば美形だ。ハゲなんて言って心底ゴメンナサイ。
　今いる場所はお城の宰相閣下の執務室であるらしい。座らされたイスのクッションがふかふかで、アヤとしては逆に座りにくい。
「まずは名前年齢出身を言え」
「葛城　綾十七歳東京生まれの東京育ちよ」
隊長の質問に対して、別に嘘をつく理由もないのでアヤは正直に答える。
「カツラギ・アヤ、珍しい名前だな。トーキョーというのは響きからして他の大陸の地名だろうな」
「お嬢ちゃん嘘はいけないな、大人に見られたくても限度があるぜ。どう見たって十二・三歳くらいだろう」
宰相閣下のコメントは後から考えるとして、隊長はどうして疑問形でなくて断定形なのだ。童顔で悪かったな（しまった認めた）！
「正真正銘十七歳！」
アヤはきっぱりと言い切る。すると隊長と宰相閣下がひそひそと、
「閣下、アレが成人女性に見えますか？」

「胸はないし肉付きも悪いし、どう見ても子供だな」
胸がないとは失敬な！胸は今現在絶賛鋭意成長中だ！胸の大きさが大人のしるしなんかじゃないやい！
　アヤが失礼男二人を睨むと、宰相閣下から「フンッ」っていうカンジで鼻で笑われた。これはアレだろうか、「ハゲ」呼ばわりを実はすごく怒っているのだろうか。ひょっとして毛髪量を日々気にしていて、その仕返しを今受けているのだろうか。人を呪わば穴二つなのか。いやいや、先に人様の身体的特徴を攻撃したのはあちらだ、自分被害者、これ大事。
「では次、聖獣ヴァーニャをどうやって見つけた？」
「ここの近くの森で、食べ物を分けてやったら勝手についてきたんだけど」
隊長の次の質問に、これもまた正直に答える。
「閣下、聖獣は餌付けされるものなのですか？」
「たとえ言い分が正しいとしても、おおっぴらにはできないな。聖獣の品格に関わる」
餌付けされたというのは確かに外聞が悪い。しかしパンダ相手に品格と言われても、アヤとしては笑いがこみ上げるばかりである。
「ところで、パンダは今どこでどうしているの？」
パンダとは城に入る前に引き離されてそれっきりだ。あんな珍妙なパンダでも、離れるとそれなりに心細い。
「あの聖獣のことか？ちゃんと保護しているぞ。全体的に汚れていたから洗うように言ってある。どうしてあんなに土まみれになっていたんだ？」
逆に隊長に質問された。何故かといえば、壁穴を強引に抜けたときに汚れたからである。しかしそれは美少年とアヤとの秘密である。
「そんなのどうだっていいじゃない。それより、私の無実は証明されたんでしょうね？」
あからさまに話を逸らそうと、アヤがそもそもここまでやってきた本題に入る。

「あー、それはだな」
「小娘、これを持て」
隊長が何かを言おうとするのを遮り、宰相閣下が、アヤに何かを差し出す。変なものだったら嫌だと思ってアヤは手を出さずにいたが、
「さっさとしろ」という宰相閣下の視線の圧力に結局負けた。
そうして差し出した手のひらにのせられたものは。
「ナニコレ、電球？」
見た目、ちょっとレトロな白熱電球である。これが一体何だというのだろうか？アヤが首をひねっていると。
ボン！
電球が音を立て、煙をふいた。
なにやらそう遠くない過去に見たことのある現象である。
「やはりな」
「魔力灯が！？どうしたんですか？」
落ち着いたように頷く宰相閣下と、驚く隊長。もちろん自分が一番驚いているとも。
「理由は分からんが、小娘は魔法拒絶の性質なのだろう」
「・・・たまーに、魔法具との相性が悪い奴がいますが、あれが酷くなったカンジですかね？」
「まあそのような認識で概ね正しい」
正直、アヤは情報過多で頭がパンク寸前である。
魔法ってナンデスカ、拒絶って妨害電波でも出ているってことですか。
ここの近くに東京はないんですか、っていうか東京をしらないんですか。
そもそも、ここは一体どこですか。
そして何より大事なことは。
「あの噴水を壊したのは、私ってことデスカ？」
「損害賠償請求はいくらになるんだろうな？」
宰相閣下がにこやかに笑っていた。

１０話　アヤ、宰相閣下の小間使いになる

すったもんだの挙句、アヤの身柄は宰相閣下に預けられることになった。

なんでも宰相閣下の言い分としては、こんな寄るだけで魔法具を壊す輩を野放しにしては置けないとのこと。どうやら危険物認定されてしまったようである。これに関しては異議はあるものの今は置いておくとして。

「私はお城に住みたくなんかない」

いままで六畳一間のアパートに住んでいた身としては、ムダに広くてムダに煌びやかで、非常に居心地が悪い。そして一番の問題は。

「どうして私がアンタの部屋に住まなきゃいけないのよ！」

何故か、アヤの居場所が宰相閣下の私室であることだ。厳密に言えば、宰相閣下の私室の隣にある、使用人の部屋である。しかし宰相閣下の私室と使用人部屋はドア一枚で繋がっており、鍵などはない。主が緊急の際は昼夜問わず駆けつけなければならないので、その用途からすると分かる気もするが、年頃の乙女としては大問題だ。

「緊急措置だ」

宰相閣下がそっけなく言う。

あれから、アヤは全体的に汚れていると言われて（森を抜けてきたり壁穴を抜けたりしたので確かに汚れていた。パンダのことは言えない）風呂に直行。二日ぶりの風呂を堪能した。それからパンダと合流。どうやらパンダが騒いで暴れたので、飼い主（？）に戻されたらしい。でも全身洗浄されて、毛皮がフワッフワになっていたパンダを、思う存分モフッて堪能する。ちなみにセーラー服は汚れていたので洗濯にまわされ、アヤは着替えにシンプルなワンピースを与えられた。そうして夜、夕食を何故か宰相閣下と一緒にとることになり、そこで今回の「緊急措置」を聞かされたのだ。

「表向きは、私付きの小間使いということになる」

その労働で、壊した噴水を弁償しろということらしい。またもや借金なのか。しかも今回は父親ではなく自分の借金である。どこまでも借金の二文字はアヤに付きまとうらしい。
ちなみにパンダは同じ部屋で夕食をもらって、幸せそうに食べている。パンダは悩みがなくて羨ましい限りである。
アヤとしても、食事に罪は無いので、残さず美味しく食べさせてもらった。
美味しい食事をいただき、食後のお茶を飲んでまったりとした空気が漂っているとき、アヤはできるだけさりげない様子を装って言った。
「ねえ、そっちの質問にはあらかた答えたわけだし、私もちょっと、聞きたいことがあるんだけどなぁ」
「なんだ、唐突に」
本当に唐突だと自分でもわかっているが、そこには触れずにスルーする。
「いいじゃない、別にご大層なことを聞きたいんじゃないの、世間話ってやつよ」
「・・・答えられることは答えてやらんこともない」
どうやら宰相閣下は答えてくれそうである。
後で後でと、ずっと後回しにして、考えないようにしていることがある。それを尋ねるのは正直怖い。しかし、これを知らなければこの先の人生設計も立たないのだ。少なくとも今までの人生設計では、ショッキングピンクのパンダに懐かれるなんてことは書いていなかったので、この時点で大幅な修正が必要であろう。
まず第一の質問。
「ここは、どこなの？」
「奇妙なことを問うな。ルドルファン国王都イゼリア、その中心にある王城だ」
アヤとしては結構勇気を出して搾り出した声に、宰相閣下はあっさりと答える。半ば予想していた答えであるものの、面と向かって答

えられると脳にガツンと衝撃が走る。
「そう、知らない国だわ。ねぇ、日本って知ってる？」
「ニホン？聞かない名だが地名か？」
「私が住んでいる国の名前よ。小さな島国だけど、世界中に知られている国なのよ」
「・・・知らないな」
「そう、知らないんだってさ、ははっ」
アヤは乾いた笑いを漏らす。
いつの間にか、パンダが側まで寄ってきていた。そのフワフワの毛皮を撫でてやる。そのフワフワっぷりに思いのほか癒されたので、もっと力を込めてガッシガッシと撫でてやったら距離をとられた。薄情者。
宰相閣下はアヤが地理を知らないと思ったのか、地図を見せてくれて、ここがこの国だと示してくれた。その地図は、アヤの見慣れた世界地図ではなかった。
ここは日本ではない。たぶん、地球でもない。納得できるわけがないが、理解しなければならなかった。
よし、一つ謎が解決、しているかどうかはわからないが、少なくともアヤの中で諦めはついた。よって、第二の質問。
「魔法って、呪文とか唱えたり、杖振り回して火の玉出したりする不思議技のこと？」
「なにやら発想が幼児並みだが、初歩の魔法は概ねそうだ」
今日一日でたくさん聞いた、魔法というのは、アヤのイメージの中の魔法とあまり変わらないようである。先程の白熱電球もどきも、魔力灯と呼んでいた。窓から外を見ても電線は見えないし、電化製品も見当たらない。今部屋を照らしている明かりも蛍光灯ではない。あれよりも、もっと自然光に近い明かりだ。
「この、魔力灯？っていうのも、魔法？」
「これも初歩の魔法の一つだな」
こういった魔法の力で動く道具のことを魔法具というらしい。

宰相閣下は一般常識的な質問に答えてくれる。正直バカにされたりするのかと思っていたのだが。ひょっとしてものしらずな田舎者だと思われているのかもしれない。
アヤはどうやら、魔法が存在する、異世界に迷い込んでしまったようである。
その後、なんだかいろいろ会話をした気がするが憶えていない。

朝日が窓から差し込んでいる。
アヤはまぶしさに目をしょぼしょぼさせつつ、うーんとソファの上で伸びをする。それによってアヤに掛けられていた毛布がずれ落ちる。
「朝かぁ」
昨日はパンク寸前だった頭の中も、熟睡したお陰でスッキリしている。
昨日はあの後いろいろ考えてしまったが、これからどうしようという件についてはあっさり決まった。
そもそも、アヤは元の世界に帰りたいと思っていない。借金取りに追われ、近い将来にはソープに売られることになるところだったあの世界に。ここでは幸運なことに住処を与えられ、借金はあるものの仕事をくれるという。だったらこのまま流されてみるのも手かもしれない。放り出されたら、その時また考えればいい。
「ようし、まずは朝ごはんだよね」
アヤは気合いを入れるように起き上がる。
が、そこで違和感が。
「あれ？」
自分はいつの間に寝ていたのだろうか？というより、どうしてソファに寝ているのだろうか？ふと横を見れば、パンダがソファに寄りかかって寝ていた。ひょっとして寝落ちしたアヤをパンダがここまで運んでくれた・・・なんてことはないなさすがに。ということは、

残るは一人だけなのだが、そのお方はどうしているのだろうか。
　朝日が差し込む室内を首をめぐらせていると、すぐに発見した。そして自分がどこにいるのかを理解した。部屋の真ん中にどでかいベッドがあり、そこに寝ている人影発見。ここってもしかしなくても、宰相閣下の寝室！？
「うわ、なんで、どうして！？」
アヤが住むのは使用人部屋だったはず。それがどうして宰相閣下の寝室！？
「・・・さっきからうるさいぞ」
ベッドに寝ていた宰相閣下が起き上がった。・・・どうして上半身裸なんだ、裸族なのか。そうだとしたらそれ以上身体を起こさないで欲しい。宰相閣下は着痩せするタイプなのか、昨日は細身だと思ったのに、朝日に照らされている身体は意外と筋肉質である。そんなことが何故分かるかといえば、アヤが視線を逸らすことが出来ずにガン見しているからだ。
　宰相閣下と視線が合って、数秒後。
「っきゃーーーー！！」
早朝のお城に、アヤの悲鳴が響いた。

１１話　宰相閣下、おかしな娘を拾う

聖獣ヴァーニャを連れた娘が街の広場にある噴水を壊したらしいという報告が、その日国の宰相であるイクスファードの元に入ってきたのは夕刻の休憩のときであった。

あの噴水は数年前に平和の象徴として作られたもので、噴水に使われている魔法構築式はイクスファード自らがつくりだした。イクスファードは宰相であると共に、優秀な魔法士であると知られていた。あの魔法の噴水は物理的に壊すのは不可能である魔法が掛けられているし、生半な魔法での攻撃も無効にするようになっている。その噴水がどうやって壊れたというのか？魔法省が大騒ぎをしているらしい。

話を詳しく聞くと、壊れたと言っても粉々に砕けたわけではなく、なんらかの方法で魔法が消去されたことにより、宙に浮いていた球体が落下したらしい。その程度であれば、また魔法を掛けなおせばいい話なのでイクスファードとしてはあまり問題にしていない。問題は、誰がどうやって魔法を消去したかだ。

休憩中だったこともあり、イクスファードはその犯人として城に連れてこられたらしい娘を一目見ようと魔法省に向かっていた。その途中の廊下で、大声で口論をする男女の声が聞こえた。うるさい上に、会話の内容が下品である。

口論しているのは、赤騎士隊の隊長アラン・マキアスと、何故かアランに担がれている女、であろう多分。なにゆえ多分なのかと言えば、女の頭がアランの背中にくるように担がれているため、イクスファードからは女の下半身しか見えないのだ。スカートを穿いているので女なのだろう。

普通よりも丈が短くなっているスカートから、すらりとした白い足がむき出している。下半身の形があまり隠れず広がらない構造をしているようで、尻の形が丸分かりである。娘は安産体型な尻のよ

うである。なんというか、下品なデザインのスカートである。
目に見える範囲からそのような分析結果を導き出したところで、アランがこちらに気がついた。
「うるさいぞ、廊下で何を騒いでいる」
そう注意すると、アランは事情聴取に抵抗する娘を連行している最中だという。確かに娘は己は壊していないと言い張り、激しく抵抗しているようである。あまつさえ、イクスファードが造った噴水の構築式を不良品だという暴言を吐く。アランは表情を引きつらせて固まっていたが、イクスファードはそこまで悪し様に言われることは最近では珍しく、いっそ娘の顔が見たくなった。しかしちょっとムッとしてしまい、子供に対して大人気ないことを言ったことを、イクスファード少しばかり反省するのだった。

娘は、この近隣の国の公用語を発音も正しく話していたが、黒髪黒目という明らかに異国の容姿をしていた。地理もあやふやで、魔法というものに対しての知識がほとんど無い。魔法があまり使われていない国の出身なのもしれない。海を渡った先にある国に機械国家と称される、カラクリで栄える国があるというからそのあたりかもしれない。
なにより問題なのは、娘が魔法拒絶の性質だということだ。魔法と反発を起こす者というのはまれにいるが、魔法そのものを消去してしまうのは驚異である。下位魔法士の魔法を消してしまう程度なのか、高位の魔法士の魔法すら消してしまえるのか。それを確認しないことには、このまま放免するわけにはいかないだろう。もし後者だとしたら、国の脅かすことになりえるのだから。
そのような事情で、娘の身柄を城に留めることにした。しかし、娘の存在を敵対者に知られるのはよくない。秘密裏に、かつ安全に身柄を留めておける場所をということで、・・・何故かイクスファードの使用人部屋へということになった。
確かに、イクスファードは側使えの使用人をもっていなかったの

で、あの部屋は空いている。魔法士でもあるイクスファードの側であれば、娘の魔法拒絶の性質を検証するにも役立つであろう。それでも、あの部屋を使うということにイクスファードはすぐさま頷けなかった。

イクスファードの私室の隣にある使用人部屋は、今人間が寝泊りできる状態ではない。はっきり言えば物置状態だ。どうせ誰も使わないのだからと、いろいろなものを放り込んである。

だが、別の部屋を用意すると、娘の存在が様々な者の目に触れることになる。そう説得され、イクスファードはしぶしぶ頷いたのであった。

娘、アヤと一緒に夕食をとるように手配し、その時にアヤに対する措置を伝えた。アヤは猛反対をした。唐突な上に強引な措置であることは認めるところであるので、その反対は当然のことであると思われた。

しかし、待遇の改善など―あれがほしい、こういった地位がほしいなど―要求してくるかと思いきや、アヤは住む場所に文句を言ったものの、要求の類は一切してこなかった。まがりなりにも王城に住まうことを許されることは、どんな状況であれ、千載一遇の機会だと思うものではないだろうか。それなのに、アヤが唯一要求したのは聖獣ヴァーニャの処遇である。

アヤがパンダと名をつけたらしい聖獣は、どうやらアヤに懐いているらしく、アヤを探しに行こうと暴れたらしい。なのでアヤと一緒にここへ住まうことになった。・・・少々かさばって邪魔くさいと思ったことは秘密である。

そんなこんなで、イクスファードたちがこちらの意見やあちらの質問などを交し合っていると、いつの間にかアヤの目元がほんのり赤くなっていた。

「だいたいさぁ、びしょーねんが助けてくれなかったらぁ、あらしたちは今夜も野宿だったわけよぉ」

アヤは赤騎士隊に捕まるまでのことを、はじめは考えながら言葉を選んで話していたのだが、だんだんとろれつが怪しくなってきた。
話の内容は非常に気になるところであるが、どうしてアヤは酔っ払うような症状が出ているのであろうか。ひょっとして、食後のデザートに含まれていたアルコールであろうか。それ以外に、アヤはアルコールを摂取していないはずである。
「ねえきいてるぅ！？ここのもんばんってぇ、すごく使えないと思うの！」
「ああ、聞いているとも」
かくして、酔っ払いの説教がしばし続き、アヤはその後酔いつぶれたのであった。
しかし、寝かせるべき使用人部屋は、未だ物置状態。仕方ないので、寝室にあるソファに寝かせることにした。酔いつぶれて寝てしまったアヤを抱き上げようとすると。
「グルグル」
何故か聖獣に唸られた。それを無視してそのまま寝室のソファに運ぶと、聖獣はずっとイクスファードの服の裾を咬んでいた。それでもアヤをソファに横たえると、聖獣はアヤの顔を覗きこんでフンフンと鼻を鳴らしていた。どうやらアヤが心配だったらしい。そんなアヤと聖獣をしばらく眺め、イクスファードも寝ることにした。
そして次の日の早朝、アヤのけたたましい悲鳴で起きることになる。

１１話　宰相閣下、おかしな娘を拾う（後書き）

この話で連続投稿はストップさせていただきます。きりがいいとこまできたので。今後はいつものペースでと思いますが、なるべくお待たせしないようにがんばります！

12話　アヤ、メイドいじめを目撃する

朝からさんざんな目にあった。

悲鳴を聞いて駆けつけた騎士には宰相閣下の寝室に侵入した痴女扱いされるし、閣下は下着一枚で歩き回るし（全裸ではなかった）、パンダは寝ぼけて転げまわって邪魔だし。朝から寝室は大騒ぎであったのだ。騎士の報告で駆けつけた隊長には「朝くらい静かにしてくれ」と怒られた。これは自分が悪いのか、いや違う、むしろアヤの方がセクハラを受けた気分だ。

それから、何故か閣下と一緒に朝食を食べる。アヤを小間使いとして雇うのなら、使用人と主人の朝食は別ではなかろうか。社長と平社員が同じ高級料亭のデラックス弁当を頼むようなものである。そう疑問に思って申し出ると、「緊急措置だ」とのこと。昨日からこればかりだ。その緊急措置とやらの具体的内容を言って欲しい。

これから小間使いとして働く上で、いつまでも宰相閣下と心の中で呼ぶのアレかと思い、閣下に名前を教えて欲しいと頼む。すると、アヤが閣下の名前を知らないことを驚かれた。これはなにか、閣下は今大ブレイク中のアイドルなのか？国民皆知っていて当然な知名度なお人なのか？自宅にテレビがなかったため学校で流行の話題についていけなかったおかげで、もはや流行を追うことを諦めてしまったアヤに、その手の知識の期待をしないで欲しい。

それでも閣下の名前を教えてもらった。イクスファードと言うらしい。それほど親しくも無い年上男性の名前を呼ぶのに抵抗があったが、姓ではなくて名で呼ぶように言われた。姓は名乗らなかったが、日本の田中さんとかみたいに、大勢いて聞き分けられない姓なのかもしれない。それでもイクスファードというのは日本人的に長ったらしくて呼びにくい名前なので、呼びやすいように短縮して欲しいとお願いした。そのお願いにもしばし絶句されたが、「イクスでいい」との答えをもらった。アヤとしてもダメもとくらいの感覚

で言ったことなのだが、物事は何でも口にしてみるものである。
　そんなことを問答している間、パンダはといえばテーブル下のアヤの横で、己に出されたフルーツ盛り合わせを幸せそうに食べていた。フルーツは何かの芸術品のような完成度で盛られており、パンダのために用意したのだろうそれはかなり気合いの入った一品である。聖獣ヴァーニャというのはそれほどに有難い存在なのだろうか。パンダ専用ご飯だが、ちょっと美味しそうだと思ってしまったアヤであった。

さて、宰相閣下改めイクスファードことイクスがアヤに本日命じたのは、使用人部屋、つまりは本来今朝アヤが寝ているはずであった部屋の片付けであった。というわけで、今朝のアヤの格好は汚れてもいい着古しのワンピース（誰かのお古）にエプロン、頭に三角巾を巻いた状態である。
「ここに寝かせられなくてよかったー」
「ガッフンゲッフン」
部屋のドアを開けてみて、アヤは心底そう思った。アヤの隣でパンダはくしゃみをしている。
　そこは、いわゆる汚部屋であった。雑多に物が詰め込まれている。生ゴミの類はないようだが、まさしく汚部屋。倉庫代わりにしていたとイクスは言っていたが、倉庫とは呼べない状況だ。倉庫ならば、ある程度の分類別整理整頓が成されていると思うのだ。しかし、この部屋は空いている隙間に物を詰め込んでいった結果こうなりました、という状態で物が置かれていた。ドアを開けた瞬間何かが雪崩れ出てきたし。もはや人、いや生物が生活する場所ではない。ここに放り込まれなくてよかったと、今朝の騒ぎも少しは容認できたアヤであった。
　片付けは、とりあえず部屋の中の物を全て廊下に出すことから始まる。イクスは捨てられない性格なのか、もはや使わないだろう机

とか、破れた椅子とか、意味不明文字で書かれている書物とか、触ったら煙を吹いた物体とか、いろいろ出てきた。捨てて良い物なのかどうか悩むところだが、イクスがアヤに片付けろと言ったからには、アヤの好きにさせてもらうことにする。廊下に出してある使われていない家具の類は、粗大ゴミ扱いにすることにした。粗大ゴミとそれ以外に分けると、ほとんどが粗大ゴミ行きとなった。廊下の見える範囲は、ほとんど粗大ゴミに埋め尽くされている。

「にしても、よくこれだけの物をこの部屋に詰め込んだものねー」

「ガフ」

アヤは粉塵を吸い込まないように、マスク代わりに鼻と口元を布で覆う。パンダもくしゃみを連発したので同じように布を巻いてやった。お陰で鳴き声がガフガフ言っている。

パンダは背中に大きなカゴをしょっていた。そのカゴの中に比較的小さなものを片っ端から放り込んでいった。しかしその中に魔法具があったのか、カゴの中から煙が出ている。その様子はまるでカチカチ山を連想させる。

「煙吹いたのはイクスさんに確認ね」

とはいえ、煙を吹いた魔法具であろう謎の物体は粗大ゴミの横で小山をなしている。アヤは壊してしまったことに少々罪悪感を憶えるが、しかしこれは不可抗力だ。アヤに片づけを頼んだときに想定されたことであり、そもそもあんな汚部屋にあったものに文句をつけられてもこちらも困る。

汚部屋の物を全部出したところで部屋を掃除したいが、廊下を粗大ゴミで塞いだままにもしておけない。廊下は皆が使うものだ。ということで、先に粗大ゴミを片付けてくることになった。にしても量が量だけに困っていると、イクスが粗大ゴミ処理要員の騎士を派遣してくれた。さすがにイクスも汚部屋を作ったことを悪いと思っているらしい。おかげで重いものは騎士の人に任せることにして、アヤはパンダのカゴに燃えるゴミを詰め、自分も風呂敷を背負って、それを捨てに行った。

イクスの部屋がある辺りは城の中でも奥にあるらしく、すれ違う人も高級そうな服を着た人たちばかりである。つまり、埃まみれのアヤとパンダはとても目立つのだ。さっきもオジサンにじろじろ見られたが、文句は汚部屋の製作者に言って欲しい。アヤは本日の仕事をまっとうしているだけである。そんなアヤとパンダがようやく焼却炉がある場所へとたどり着いたとき、そこには先客がいた。

「やめてください！大きな声を出しますよ！」

「誰もこないさこんなところ。なあいいだろう？」

「嫌ですやめて！」

「そう言われると余計に燃えるね」

焼却炉がある外へ繋がっているドア越しに、そんな男女の声が聞こえる。

誰だ昼ドラのようなベタな会話をしている奴らは。昼ドラの時間にはまだ早い。昼ドラは昼食の後にあるから昼ドラなのだ。

アヤは目の前のドアを開けるべきか迷う。小間使い勤務初日にして試練である。しかも男が言うとおり、アヤ以外に誰も来ない。よって二人の会話に割って入るなり無視するなりの対応をするのはアヤしかいない。他人のセクハラ現場に居合わせたら、どうするのがいいだろうか。アヤはしばし考える。

「とりあえずゴミを捨てに行くか」

「ガル」

結論として、アヤはまずは自分の仕事を終わらせることを優先することにした。ここで聞かなかったフリをして出なおしても、余計な時間をかけるだけである。

バン！と勢いよくドアを蹴り開けた（両手が塞がっていた）アヤは、驚いて動きを止めた男女の前を、視線も合わせず通り過ぎる。そしてゴミが集められているあたりに、アヤが背負っていた風呂敷をおろす。パンダのカゴの中身もそのあたりに置いておけば、ゴミ捨て終了だ。そこでようやく、アヤは男女の方に視線を向けた。

「それは痴漢行為ですか？それともちょっとマニアックなプレイですか？」
しばらくぽかーんとした表情をしていた男女だが、女の方が早く我に返った。
「ち、痴漢です！助けてください！」
女が涙声で懇願すると、男もようやく我に返ったようで、下品な笑顔で言い繕う。
「なんだよ、いいとこなんだから邪魔するな」
「不合意の行為は犯罪とみなす」
どうやら痴漢だったらしい。痴漢は全ての女性の天敵である。
「ガルル」
パンダも目の前の男を敵と見なしたのか、アヤの横で牙を向いている。こんなショッキングピンク模様でも、一応大型の獣である。
「行け、パンダ！」
アヤの号令のもと、パンダが男に向かってどっしどっしと突進する。
「ひいぃ！」
凶暴そうな（？）獣に恐れをなしたのか、男は情けない声をだして逃げていった。たわいないものである。
「ありがとうございます、助かりました！」
痴漢に言い寄られていた女が、アヤに深々と頭を下げてお礼を言う。女はウエーブのかかった明るめの茶色の髪と眼の、可愛らしい感じの人であった。
「私だって一人だったら助けなかったわ。お礼はパンダにしてね」
アヤが心中を正直に言うと、女は目を丸くしたが、すぐに声を立てて笑った。
「パンダっていう名前なんですか、ありがとうパンダさん」
女は律儀にパンダに頭を下げる。それに対して、パンダはちょっと得意気にしている。
「あなた見たことのない人ね、新人さん？」
笑顔を浮かべると、女は余計に可愛らしく見える。

「今日から働くピッカピカの新人よ」
「そう、私はアンネというの」
相手に名乗られたからには、名乗らねばなるまい。
「私はアヤよ、よろしくね」
アヤ、小間使い初日にして、友達ができたようである。

13話　アヤ、美少年と再会する

セクハラ現場から救出したアンネに連れられて、昼食を食べに食堂に来た。

「緊急措置」とやらのせいで、アヤは夜と朝はイクスと二人っきりの食事であったので、食堂という大勢いる場所での食事は正直嬉しい。考えてみるまでもなく、イクスとアヤの共通話題などないのであって、当然食事の場を盛り上げる会話など皆無である。ただひたすら黙々と食べる食事なんて、せっかくの食事も美味しくなくなるというものだ。可愛い系の女性と一緒に食べる昼食の、なんと美味しく感じられることか。思えば昨日の昼食は、パンダと食べたのだ。

そのパンダはというと、アヤの隣で分厚いステーキを食べていた。香味ソースのよい香りがして、アヤは正直一口欲しかった。今朝のフルーツ盛り合わせといい、パンダのご飯は気合いが入っている。ちなみにアヤの昼食メニューはパスタセットだ。

「パンダさんは私の恩人だものね、このフルーツはお礼よ」

アンネはパンダのお皿にモモのようなフルーツを入れた。この場合は恩人というより恩獣であろうか。パンダに恩を感じるとは、アンネはいい人である。

そんなことでアンネと打ち解けたアヤは、アンネがどうしてあそこにいたのか聞いた。

「へえ、アンネは王子様のお世話係なんだ」

「王子様付きといっても、下っ端だけどね。今日もゴミ捨てに言ったらあの騎士に捕まったの」

食事しながら苦笑気味に語るアンネは、王子様付きというだけあって、着ている制服も紺色の高級そうな素材で作られた上品なものであった。間違ってもメイド喫茶の制服と一緒にできないシロモノである。

アヤはといえば、さすがに全身埃まみれで食堂に行くのも気が引けたので、一旦着替えに戻った。とはいえ、アヤが着替えを持っているわけではないので、着替えられるものは昨日の夜から着ていたワンピースしかない。結果として寝巻きにしてしまったそれに着替えるのもなぁ、と迷いつつイクスの部屋に戻ると、アンネとは色違いの深緑色であるが、あれと同じ制服が何者かによって用意されていた。アヤはそれに着替え、同じく埃まみれなパンダをブラッシングしてやって、アンネとの待ち合わせ場所に行くと、

「その色の制服は見たことないわ」

とアンネに首をかしげられた。どうやら制服の色で所属が分かるようになっているらしい。たぶんこの色はイクス付きの色なのであろう。イクスの使用人部屋の状態がアレであるので、今までお付きの人はいなかったのではないだろうか。朝はアヤが騒いだから人が来ただけで、着替えなどの身の回りの準備などは、イクスは自分でやっていた。ああいう偉い身分の人は着替えるのも誰かに手伝ってもらっているイメージだったのだが。

ともかく、見慣れない色の制服を着て、パンダを連れたアヤが食堂で目立っているのは確かだが、アヤはそんなことはこれっぽっちも気にする性分ではなかった。やれ貧乏人だとか、同級生から迫害の対象にされたりするのは慣れていたので。

「あんな昼ドラの脇役みたいな男は相手にすると付け上がるのよ。無視が一番！あんまりしつこかったら上司に言いつけたら？実際仕事の邪魔そうだし」

アンネは昼ドラという単語は理解できなかったものの、アヤの言いたいことは伝わったらしい、

「そうね、相手が貴族の方だから静かにしていたのだけれど。今度兄さんに相談してみるわ」

「へー、お兄さんいるんだ。騎士やってる人？」

「そうよ、今度紹介するわ」

女同士のおしゃべりに花を咲かせていると、昼の休憩時間が終わっ

た。

アヤは午後も、イクスの部屋の外に溢れた物の片付けに追われていた。

今夜この部屋で寝ることは諦めなければならない覚悟を決めていた、午後三時のおやつ時。それはこっそりとパンダに忍び寄っていた。

そして。

「えーいっ！」

「ギャッフン！」

子供の声がして、次いでパンダの悲鳴がした。手伝いの騎士と共に未だ廊下の片付けをしていたアヤは、すぐ後ろでカゴを背負って待機しているパンダを振り返った。

「うわーいふかふかー♪」

「ガゥンガゥン！」

子供がパンダに抱き付いて、パンダは手足をじたばたさせている。どうやら不意打ちで抱きつかれたらしい。

「パンダ、なにしてんのよアンタ」

こんなにあっさり子供に捕まって、野生のカンはどうしたと問いたいアヤだった。そんなおたおたしているパンダに抱き付いていた子供が、くるりとアヤの方を振り向いた。

「あー、やっぱりおねえさんだ！」

「あれ？キミは昨日会った」

なんと、パンダに抱き付いていたのは、アヤとパンダの恩人である美少年ではないか。どうしてこのような場所で会ったのかと尋ねようとすると。

「殿下、でーんーかぁー！困ります、私が侍女頭に叱られますー！」

廊下の向こうから、アンネが大声を上げながら走ってきている。

「聖獣ヴァーニャを連れた女性って、きっとおねえさんのことだと

思ったんだ！」
「ガウーン！」
「殿下、お部屋に戻りましょうよ！」
「でんかって、デンカって、殿下？」
美少年はひたすらパンダに抱き付いて撫で回すし、パンダは悲鳴をあげて逃げ回るし、アンネは涙声で美少年に縋り付くし。誰もアヤの疑問に答えてはくれない。
現場の混乱は、片付けの様子を見に来たイクスが現れるまで続いた。
ちなみに。廊下に放置してあった煙を吹く物体の小山については、みっちりとイクスに説教された。あんな汚部屋に入れたままにしていたのはイクスであるのに、説教をされるというのに納得が行かないアヤであった。

思いがけず再会した美少年の名はエクスディア、なんとその正体はこの国の王子様であった。
王子様というのはたいてい城の中にいるものではないだろうか。それがどういうことになって昨日は城の外どころが街を囲む外壁の外にいたのだろうか。非常に気になるところであるが、エクスディア王子ことエディ（本人が愛称を希望）に「しーっ！」とゼスチャーで黙っているように言われたので、アヤとしては聞けずにいる。今度機会がある時に聞いてみようと思う。
王子様と宰相閣下の登場で、廊下の片付けは中断となる。通行スペースは確保できたので、本日の作業はここまでいいだろうとのイクスの話であった。汚部屋の製作者がえらそうに命令するなと言いたいところを、アヤはぐっとこらえる。イクスはこれでもアヤの雇用主であるからして。それはともかく、片付けがここまでだとしたら今夜のアヤの寝床はどこになるのだろうか。昨夜と同じあそこではないだろうな、と今から不安になる。

そんなアヤの不安を置き去りに、イクスとエディは和やかに午後のお茶を飲んでいる。
まだ勉強の時間ではないのかというイクスの問いに、エディがにっこり笑顔で答える。
「ヴァーニャに会いたかったんだもん」
「だからと言って、無断で抜け出してくる奴があるか。侍女まで巻き込んで」
イクスに叱られても、エディはこたえた様子は無い。
アヤは小間使いのお仕事として、アンネと一緒にお茶の給仕をしている。エディが帰らないとアンネも帰れないわけで、宰相閣下の部屋でお茶を入れるということにアンネは緊張してガチガチである。下っ端だという話は謙遜ではなくて本当であったらしい。
本日の片付けが終了したことで背中のカゴを下ろされたパンダはというと、エディの隣でちゃっかりお茶菓子のクッキーをもらっている。
「ねえ、このヴァーニャはまだ登録証をもらっていないの？」
エディがパンダを餌付けしながら聞いてくる。
「あ、忘れてたわ登録証」
アヤはいろいろなことがありすぎて登録証のことを忘れていた。そもそも不幸の原因であるとも言える登録証は、確か神殿で発行されるのであったか。というより神殿ってどこだろう。
「未登録のヴァーニャを、城内でうろつかせるわけにはいかん。手配はしてあるので明日の朝にでも行ってこい」
登録申請はしてあるので、あとはアヤが飼い主として登録してくればよいとのことだった。
「僕も一緒に行くー」
そう言いながら、エディはパンダにバフッと抱きつく。パンダもようやく慣れたのか、エディがしがみついても暴れなくなった。
どうでもいいが、片付けの後なのでパンダは汚れていると思われる。王子に汚れをうつして、あとで王子付きの侍女さんに起こられ

ないだろうか。
エディはパンダをひとしきり構い倒して満足すると、アンネを伴って自分の部屋へと帰っていった。

ちなみに、「緊急措置」につき、アヤの今夜の寝床も宰相閣下の寝室のソファであった。

１４話　アヤ、パンダの主人になる

今朝は寝ぼけたせいでソファから転げ落ちたアヤは、アヤの下敷きになったパンダの悲鳴で目が覚めた。そして同じく目を覚ましたイクスの下着姿に今度はアヤが悲鳴を上げ、悲鳴を聞きつけた騎士にまたもや乱入され、隊長に「どうして静かに起きれないんだ！」と怒られた。

　これって自分が悪いのか？むしろうら若き乙女と同じ空間で寝るというのに下着だけなイクスが全面的に悪いと思うのは自分だけなのか？イクスがきちんとパジャマを着用してくれたら静かな朝に溶け込める気がするのだが。そんなことを考えつつ説教を受けているアヤの隣で、パンダは二度寝をしていた。

　そんなこんなで騒がしい朝を過ごしたアヤは、朝食時にイクスに本日のお仕事を命じられる。

「午前中に神殿で登録証を受け取るように」

パンダの登録証が出来ているはずなのだそうだ。

「はーいわかりました」

ここでその件についての話は終わった。

　その後特に会話が弾むでもなく、アヤとイクスは静かにお茶を飲む。アヤは神殿の場所が分かっていないものの、誰かに聞けば分かるだろうと思っていたし、イクスも神殿への道順など説明するつもりもないらしい。ここでアヤがイクスに「神殿ってどこですか」と一言訪ねるとそこから会話が流れるかもしれないのだが、このあたりは二人の会話のキャッチボールの下手さゆえであろう。

　しかし朝食が終わり、イクスが仕事にでかけようという頃に、予想外な迎えが来た。

「おねーさーん、いーこーうー？」

こちらが返事をする前にドアが開き、なんとエディがアンネをお供に立っていた。アンネはなにやら魂が抜けたような顔をしている。

イクスが自分のこめかみの辺りをグリグリと揉んでいる。
「・・・一応聞いておくが、朝の勉強はどうした？」
そんなイクスの問いかけにも、エディはにっこり笑顔である。
「だって昨日僕が神殿に案内するって約束したもんねー」
エディの返事は答えになっていない。
「つまりは脱走してきたということか」
イクスがふかーいため息をつく。
ねっ？とエディに可愛らしく首をかしげられても、アヤとしても困る。エディが付いてくると発言したような気もするが、本当に来るとは思わなかったのだ。
エディの後ろではアンネが泣きそうな顔をしていた。どうやら強引に脱走の共犯者にされてしまったらしい。
そんな周囲の空気はなんのその、エディはさっそくバフッと抱き付いている。
「うわーいヴァーニャ、今日は埃臭くないね」
昨夜ちゃんと風呂で洗ってやったので、パンダの毛皮はふかふかである。パンダも昨日でエディに慣れたらしく、抱き付かれてもあまり騒がなかった。
「どうしましょうかイクスさん」
このままエディを連れて行っていいものか、アヤがイクスに尋ねると、イクスは少々驚いたような顔をした。
「どうしたんですか？」
アヤが不思議そうにイクスを見ると、イクスは咳払いをして表情を引き締める。
「いや、仕方が無いのでさっさと行ってこい」
「了解です」
こうして王子様が道案内役になった。
「おおぉぉヴァーニャさまぁ！こうしてお目にかかれるとは至福の

かぎりでございますぅ、ああぁなんと神々しいお姿！」
神殿では怪しいオジサンが待っていた。
　キラキラした服装のオジサンは、アンネをお供にしたエディの案内でやってきた神殿の入り口前にいた。同じ場所をうろうろとするオジサンの姿は不審者以外の何者でもない。しかも、そのオジサンはパンダの姿を発見すると物凄い勢いで突進してきた。涎をたらさんばかりのオジサンの勢いに、パンダもドン引きである。
　アヤの後ろに隠れようとするパンダを鬱陶しがりつつ、「誰これ？」とアンネに尋ねる。エディはというと、パンダの背中に乗っていた。昨日からずっと乗りたかったらしい。
「この方が神殿長さまよ」
神殿長と聞くと、ズルズルの服を着た偉そうなおじいちゃんというイメージがある。しかし目の前のオジサンはおじいちゃんという歳ではない。まだ四十歳そこそこくらいではなかろうか。よくよく見れば、ダンディなカンジがしないでもないが、パンダを見て涎をたらしている姿はやはり不審者だ。
「いつもはこんな方ではないのだけれど、もっと凛々しい方なのよ」
そうフォローするアンネも、この神殿長の様子を見て残念な気持ちが顔に表れ出ていた。ちょっぴり憧れの人だったのかもしれない。
「神殿長、いいから早く登録証をちょうだい」
そんな微妙な空気を、エディのにっこり笑顔が吹き飛ばした。
「おお王子殿下、いらしていたのですか！」
神殿長はパンダの背中に乗っているエディに今初めて気付いたらしい。本当にパンダしか見えていなかったらしい。
「最高位の希少聖獣のヴァーニャを見て興奮するのは分かるけどさぁ、僕も暇じゃないんだよね」
暇どころか、朝の勉強を脱走してきたエディに言われたくない台詞である。
　しかしアヤは今のエディの言葉に、ふと引っかかりを憶えた。
「最高位の聖獣って言った？パンダが？」

「そうだよー、生息地はもっと北の地方で、この辺りには棲んでいないんだ。だから僕も本の絵でしか見たことないよ」
「聖獣たちの頂点にあるヴァーニャは、まさしく神の使いという二つ名に相応しい存在でありますな！」
そんな神殿長のごたくは置いておくとして。
「てことは、ユニコーンとかよりも偉いの？あ、ユニコーンっているのかしら」
聖獣と聞いてアヤが思いつくのは、本やゲームでポピュラーな存在であるユニコーンくらいであった。
「ユニコーンなんて珍しくないじゃない。うちの城にもいっぱいいるよ」
ユニコーンなんて目じゃないくらいに偉いようである。このパンダが。パンダのくせに。道理で昨日からやけにパンダの食事が豪華だと思った。あれは最上級のおもてなしだったのだ。
今度からパンダのご飯を一口貰おうと思ったアヤだった。

結局、それからエディと神殿長とのヴァーニャ談義が始まり、登録証が貰えたのはお昼をまわった頃であった。もらった登録証がペットの迷子札のようだと思ったのは、言わない方がいいだろう。

15話　アヤ、美女に会う

「今日一日がんばるわよー！」
「ガル！」
「・・・頼む、朝は静かにしてくれ」
朝から元気に雄たけびを上げるアヤとパンダに、イクスは眠たげな様子で苦情を言った。

昨日は神殿から帰ってもパンダと遊びたがるエディに付き合ったおかげで、汚部屋の片付けが全く進まなかった。片付けが進まないということは、イクスの寝室ソファで寝る生活が続くということであって。乙女にとってそれは由々しき問題なのである。
　というわけで、アヤは今朝は夜が明けたばかりの早朝から掃除用のお古のワンピースを着込んで掃除にいそしむことにした。眠そうなイクスを叩き起こし、さっさと朝食を食べてもらって仕事に追い出す。イクスが居ては掃除が始められないのである。イクスにはなにやら文句がありそうであったが、アヤとしては今夜の寝る場所がかかっているので聞かないことにした。
　有難いことに、廊下に溢れていた粗大ゴミの類は、騎士の皆さんが昨日きれいに片付けてくれていた。掃除をするために騎士になったわけではないであろうに、アヤは今度手伝ってくれた騎士に何かお礼をしようと考える。
　廊下が片付いたということは、あとは部屋の中を掃除して、家具を調えるのみである。パンダにカゴを背負わせて移動ゴミ箱にして（迷子札装着済）、アヤはモップがけと雑巾がけに精を出す。ここ何年かで久しぶりに開けられたに違いない窓の金具は、錆び付いてギシギシと音を立てている。窓ガラスもくもりガラスかと思いきや、拭いたら綺麗な透明ガラスだった。ここはどれだけの期間汚部屋だ

ったのだろうか。
　しばらくの間アヤとパンダが無心に掃除すること数刻。

「すごーい、なんだか魔術みたいだわ」
アヤを昼食に誘いに来たアンネが、物凄く感動したように呟いた。
さもあらん、一昨日の午後の物で溢れた状態からここまで汚部屋が蘇るとは信じられないのであろう。アヤ自身も、がんばった自分を自分で褒めてやりたい。床や壁を磨き、本来の姿を取り戻したガラス窓から差し込む日差しに照らされた部屋の何と明るいこと。一昨日ドアを開けたら雪崩を起こした部屋とは思えない。あとは家具を入れるだけである。昼にベッドやタンスは運んでやるとイクスが言っていたので、続きはそれからになる。
「ねえ早く着替えて、お昼を食べに行きましょうよ」
アンネに急かされ、アヤは昼食に行く前に着替えることにした。アヤがイクス付きの深緑色の制服に着替えている間に、アンネが埃を被ったパンダをブラッシングしてくれた。

食堂で相変わらず目立っているアヤとパンダであったが、そんなことは気にせずにアヤは昼食を堪能していた。
「うーん美味しい！」
今朝は早くから掃除を始めたため、アヤとパンダは非常にお腹が空いていた。
　本日のパンダの昼食は魚の香草蒸しであった。パンダが口をつける前にアヤが一口貰ったところ、非常に美味しかった。アヤは香味ソースのステーキを食べている。先日のパンダのご飯が美味しそうだったことによるチョイスである。その上、労働の後はがっつり肉を食べねばスタミナがもたないという理由もあった。
「これで今夜からあそこで寝れそうだわぁ」

いくらふかふかであるとはいえ、所詮はソファ。ちょっとごろ寝をする程度ならばともかく、長時間寝るには適さないものであることがこの三日で判明した。手足は思うように伸ばせないし、寝返りも打ち辛いし、寝ぼけて落ちたお陰で腰が痛いし散々である。だがしかし、今夜は運び入れられるれっきとしたベッドという寝具で寝られるのだ。これでソファから落ちることからおさらばできるというものである。

そんなアヤに、アンネが不思議そうな顔をする。

「え、今片付けている部屋ってアヤの部屋だったの？」

「そうよぉ、使用人部屋をあんな汚部屋にするなんて、宰相閣下どんだけってカンジよ」

アンネはアヤが何をしていると思っていたのだろうか。アンネは未だ不思議そうにしている。そんなアンネの様子に、アヤは首を傾げる。

「だったら、今までどこで寝ていたの？」

当然の疑問である。どうやらアンネからは、アヤがどこからか通ってきてると思われていたようである。住み込みの使用人が住まう寮ではアヤの姿を見かけないからという理由らしいのだが。

「えーと」

宰相閣下の寝室のソファです、とバカ正直に言えばとんでもない大騒ぎになることくらい、アヤにだってわかることである。イクスの奥さんという人の姿も見たことないし噂も聞かない。それはすなわち、アヤとイクスは未婚の男女が一つ屋根どころが一つ部屋に一緒に寝ているということになる。ただでさえ毎朝騒ぎを起こしているせいで、騎士の方々に妙な疑いを持たれていないか心配しているところであるのに。

「空いている部屋でテキトーにね」

なのでアヤはウフフ、と笑ってごまかすことにした。

そうして昼食を終えた午後。騎士の方々が家具を持ってきてくれた。
今更なのであるが、こういうことには騎士ではなく、専門の業者がいるのではないだろうかとアヤとしても疑問に思うのだが、騎士たちの顔も覚えて気安くなったのも確かなので、深くは突っ込まないことにした。
実はこの手伝いの騎士たち、イクスに付いている精鋭であり位も高い。当然普段掃除の手伝いなどするはずもないのであるが、アヤの存在を出来る限り隠匿しておかねばならないことゆえの措置であることなど、アヤの知る余地もなかった。ちなみにアヤが昼食を食べている食堂も、王宮の奥で働く者専用の食堂であり、出入りする人間も限られているということで、イクスも黙認しているのだ。加えて、王子付きであるアンネには、仕事の間のことについて口外してはならないという規則もあったりする。イクスもアヤについての情報が漏れることに気を配っていたのだ。
しかし、その時事件は起きた。

タンスとベッドに小さめのテーブルセットが運ばれてくる。
「それはここにお願いします」
アヤが運んでくれる騎士に家具の位置を指示していると。
「んまあぁぁあ、本当にネズミが入り込んでいましたわ！」
女性のキンキン声がアヤの耳を攻撃してきた。
驚きのあまりアヤは抱えていた布団を落としてしまい、アヤの目の前にいたパンダが布団に埋もれてしまった。
「ガフー！」
「あぁぁ悪かったわ」
布団の下で暴れるパンダを宥め、アヤは素早く布団を抱えなおす。
布団が獣の毛まみれになっては今夜の寝床がパアになる。
「イクスファード様の私室に、このような小汚いネズミを入れるなんて、あなた方はどういう神経をしていらっしゃるのかしら！」

またキンキン声攻撃を受けた。
　アヤが声のした方を振り返ると、真っ赤なドレスを着た黒髪を巻き毛にした美女が、開けっ放しのドアの向こうに立っていた。ネズミネズミって、たった今掃除を終えたばかりの部屋に、そんな生物はいないはずである。いてもパンダが脅せば速やかに退場してもらえるだろう。
「まあ嫌だ、ネズミがこちらを見ましたわ、疫病を持っていたらどうしましょう！ナマイキにもイクスファード様の侍女の制服を着ているなんて！」
・・・ネズミというのは、どうやらアヤのことを指しているらしい。騎士の方々も、キンキン女性の登場に、とっさに対応できずにいた。
「お前たち、ネズミ駆除の薬を！」
美女の背後のお付きの人たちに、美女の号令が下る。アヤは未だこの事態に脳内が対応できていなかった。その結果。
バフゥッ！
大量の白い粉が、室内に撒かれた。開けっ放しの窓から入る風が、粉を天井まで巻き上げる。
「ハックシュン！」
「ガッフゲッフ！」
粉を思いっきり吸い込んでしまったため、アヤはくしゃみが止まらないし、目がショボショボする。家具を運んでくれていた騎士も粉を被ってしまい、同じような状態であった。
「おーほほほほほほ！！」
粉まみれになったアヤとパンダと騎士の方々を残して、美女はドップラー効果付きの高笑いをしつつ去っていく。せっかく掃除をした室内も白い粉まみれな状態である。
騒ぎを聞いて駆けつけたイクスは、粉まみれな室内を見て目を細めた。

「災難だったな」
と一言アヤに慰めの言葉を言って、騎士に何がしかの指示を出して仕事に戻った。アヤとしてもその日は掃除を続ける気にならなかった。
くやしいので、その日の夕食はやけ食いしてやった。

せっかくの今夜のふかふかベッドが台無しじゃないか！いつか覚えていろよあの女！

１６話　宰相閣下、小間使いに振り回される

その知らせがイクスファードの元へ届いたのは、執務の合間の休憩をしていた時であった。
「アルカス家の令嬢が奥宮に入った？」
イクスファードは眉をしかめる。
「見張りの騎士の制止を振り切り、強行突破した模様です」
イクスファードの執務官が、淡々と報告する。
「騎士たちも、公爵家の令嬢を相手に手荒な真似は控えたためかと思われます」
「それで今はどうしている？」
「令嬢の一行は閣下の私室前で騒ぎを起こして、勝手に帰ったそうです」
「・・・」
イクスファードの私室周辺は、イクスファード自身が大勢の者に纏わりつかれることを嫌ったこともあって、もともと人員が少ない場所であった。そして今はアヤの身柄を隠す意味もあり、人の立ち入りを制限していた。立ち入りを許しているのはイクスファードの護衛官である側近の騎士だけである。その騎士たちは、何故かアヤに頼まれて大型ゴミの片付け作業に追われていたが。そんな理由で人が少なかったことが、どうやら裏目に出たらしい。こうなっては、何がしかの理由をつけて自分の側に控えさせた方がいいかもしれない、とイクスファードは考える。
「少し様子を見に行こう」
イクスファードは立ち上がった

イクスファードの私室の前では、何かの粉にまみれて真っ白になったアヤと聖獣ヴァーニャ、そして騎士たちが、お互いを慰めあって

いた。
「う～ふ～ふ～、今夜こそ、今夜こそふっかふかお布団で寝れるとおもったのに～のに～」
「アヤちゃん、くじけちゃいけないよ、宰相閣下だって考えてくださるさ」
しゃがんで床に指先で丸をぐるぐる描いているアヤに、騎士の一人が肩に手をかけた。
　アヤは少し顔を上げる。
「宰相閣下にお願いしたらあのでっかいベッドを譲ってソファで寝てくれるかなぁ？」
「・・・いやそれはどうだろう」
騎士は何と言えばいいのか困っているようである。それはそうだろう、上司の寝室事情のことなど聞かされても困るというものである。そもそも、年頃の乙女ならば寝室での話を男にするなと説教すべきだろうか。
「ゲッフガッフ！」
その横で、ヴァーニャは粉が鼻に入ったのか、くしゃみが止まらないらしい。
　それにしても、いつの間にか騎士たちはアヤと名前を呼ぶくらいに仲良くなったらしい。なにやら少々胃のあたりがムカムカするが、それがどうしてかはイクスファードにはわかっていない。特に胃腸の病気はもっていないはずであるが。今度医者にかかるべきであろうか。
「何があった」
胃がむかむかするので不機嫌な表情のまま、イクスファードは騎士たちに問いかけた。そこで初めて騎士たちとアヤはイクスファードに気付いたらしい。騎士たちは慌てて姿勢を正して敬礼するが、全身粉まみれではそれも決まらない。そんな騎士をよそに、アヤはイクスの姿を認めると、立ち上がってこちらに駆け寄ってきた。
「どうした、アヤ」

ことさらゆっくりアヤの名を呼ぶ。
思えば、イクスファードがアヤを名で呼ぶのはこれが始めてであった。先日アヤから「イクスさん」と呼ばれたときは心に理由のわからぬ衝撃を受けたものだが、アヤは初めて名を呼ばれてもそれをスルーする。
「聞いてよイクスさん～、いまひっどい女が来たんだってば！」
そして今しがたのアルカス家の令嬢が起こした騒ぎを怒り交じりに報告する。どうやら唐突に現れた令嬢にネズミ駆除の薬を投げつけられたらしい。道理でアヤから少々刺激臭がすると思った。片付けられて今頃は家具が入っていたはずの使用人部屋は、天井まで粉まみれでひどい有様であった。ヴァーニャも全身真っ白なせいで、何か別の生物に見える。
一方、イクスファードにタメ口を聞くアヤに、騎士たちは恐怖の表情を浮かべる。そんな騎士たちを横目に、イクスファードはアヤの髪を真っ白にしている粉を払ってやる。艶やかだと感じたアヤの黒髪も、粉まみれのせいで白髪頭に見える。
「災難だったな」
「災難なんてもんじゃないわ！これは反撃しないと気がすまないわ！今度ゲジゲジを一杯集めてあの女のベッドにばら撒いてやるんだからー！！」
元気に雄たけびを上げるアヤ。ゲジゲジの嫌がらせも本気でやりそうである。にしても嫌がらせをうけて落ち込んでいるのではないかと心配したのだが、意外とアヤの神経は図太くできているようである。
「今日はもう掃除はいいから、早く風呂に入れ」
アヤはまだ文句を言い足りない様子であったが、イクスファードの私室に追いやる。
そんな二人から離れた場所では。
「なあ、アヤちゃんが宰相閣下の寝室で寝てるって話本当だったんだな」

「アヤちゃん専用ベッドが今日届いたってことは、今までどこで寝てたんだって話だよな」
「俺は毎日痴話喧嘩の仲裁にアラン隊長が呼ばれるって聞いたぞ」
「今の話だと、宰相閣下はアヤちゃんからベッドを追い出されるってことだよな？ってことはだ」
こそこそとそんな会話をしている騎士たちを、イクスはじろりとにらみつける。
「お前たち、今後許可なき者を一切私の部屋に近付けるな。貴族相手であっても、多少手荒な真似も構わん」
「了解であります」
直立不動で返事を返す騎士たちを横目に、イクスは執務室に戻って行った。

夜、イクスファードはもりもりと自棄食いのように食事を平らげるアヤと共に夕食をとった後、残っていた仕事を片付けるために執務室へ戻った。
　そして夜も更けた頃に寝室に行くと。
「本当に寝たのか」
イクスファードのベッドの真ん中で、思いっきり手足を伸ばして寝ているアヤの姿があった。思えば今日は朝から、今夜の布団を期待しているようであった。早朝からの騒がしさも、何が何でも布団で寝るのだという執念がアヤを駆り立てていたのかもしれない。そう考えると、アヤをこのベッドから追い出すことが可哀相になってくる。ちなみにヴァーニャはベッドの上の、アヤの足元に転がっている。ずうずうしくベッドに上がりこんだらしい。シーツが獣の毛まみれになったらどうしてくれるのだろう。
「仕方ないな」
幸いなことに、イクスファードのベッドは広い。人が二人並んで寝てもまだ余りあるほどに。イクスファードはアヤを転がし、己の寝

る空間を確保する。イクスファードの脳内に、自分がソファに寝るという選択肢は無かった。ここは自分の私室の自分の寝室の自分のベッドであり、よって自分にはここで寝る権利があるのだ。

「んむぅー」

アヤが途中で唸り声を上げたが、起きることはなく再び寝息を立てる。

「おやすみ」

ちいさく声をかけて、イクスファードも布団に潜り込んだ。

翌朝、どうやら寒かったせいで無意識に暖をとろうとしたらしく、イクスファードと抱き合った状態で目を覚ましたアヤが悲鳴を上げたのは言うまでも無い。

17話　アヤ、食生活を改善する

ルドルファン王国宰相イクスファードの身辺に、最近一人の専属侍女がついたらしいという噂は徐々に王宮に広まっていた。今まで「面倒臭い」の一言で世話をする人間を持たなかった宰相閣下の心変わりに、王宮の者たちは興味深々である。

曰く、いつも聖獣ヴァーニャを連れているらしい。

曰く、王子殿下のお気に入りらしい。

曰く、同じ寝室で寝起きしているらしい。

曰く、親しげに愛称を呼んでいるらしい。

あの、今まで浮いた話の一つもなかった宰相閣下のスキャンダルに、今王宮は大騒ぎである。しかし、その騒ぎの渦中の人間はというと、そんな噂になっていることなど、全く知らずにいるのであった。

「いやはや、噂話とは馬鹿にできないものですね」

「嬉しそうだな、サラディン」

アランは隣の男をじとりと睨む。

アランと並んで立っている男の名はサラディン・ロズモンド、白騎士隊の隊長である。

アランとサラディンは騎士団の団長に呼ばれて王宮の団長室まで来ていた。そこで今噂の宰相閣下の専属侍女について騎士団長から尋ねられたのだ。

「その女、宰相閣下の愛人か？」

騎士団長のその質問に、アランは思わず笑いを抑えきれず吹き出した。愛人、あの山猿のような小娘にこれほど似合わない言葉があるだろうか。あの小娘の年齢は十七歳だそうだが、子供っぽい外見と子供っぽい内面とで、まったくそうは思えない。

「愛人云々は置いておくとしても、この噂はちょっといただけませんね」
アランの隣でサラディンが首を傾げる。
「奥宮からほとんど出ない侍女の噂をどこで仕入れるんでしょうか」
奥宮は王族は住まう場所であり、当然警備の人員も厳選している。だからイクスファードもアヤを隠す場所として奥宮を選んだのだ。
「あー、そのことについては少々心当たりが」
アランが軽く片手を上げて発言する。
実はアランの妹が奥宮で、王子殿下付きの侍女として最近働き始めた。新人なので下っ端仕事がほとんどで、用事を言いつけられては奥宮を駆け回る毎日だという。そんな仕事の最中に、ある騎士がやたらと絡んできて、先日はゴミを出しに行ったときに待ち伏せされて襲われそうになったのだそうだ。
「奥宮を警備する騎士たるものが、なんという嘆かわしいことでしょう」
「俺も妹に聞いてつい昨日知ったんだ」
嫌悪感を露にするサラディンに、アランは肩をすくめる。
「で、その襲われそうになったときに助けてくれたのが、同じくゴミを出しにきていたアヤだったらしい」
サラディンはその話を聞いて、少し考えるように顎に手を当てる。
「アルカス家の令嬢の耳にアヤ嬢の噂を吹き込んだのも、その騎士の仕業でしょうかね」
アルカス家の娘が、イクスファードの私室前で騒ぎを起こし、なおかつ使用人部屋にネズミ駆除の薬を大量に撒いていった事件は昨日のことである。アルカス家には昨日のうちに正式に抗議の文書を送ってある。
アルカス家が公爵の家柄であるとはいえ、何の役職にもついていないただの娘が奥宮まであっさり入り込むなんてことは不自然である。奥宮以前に、表宮のどこかで止められていなければならないのだ。警備に手抜かりがあったと非難されても反論できないところで

ある。
「全く、一度シメてやらんといかんな。ところでアラン」
騎士団長はニヤリとした笑みを浮かべる。
「そのアヤという娘、どういう娘だ？」

アヤは今朝も相変わらずの二人で一緒にご飯である。そして今朝も朝から騒いで隊長に叱られた。もはや朝の恒例行事になりつつある。
しかし、何度どう考えても、なにゆえにアヤとイクスが一つベッドの上で抱き合って寝ているという状況に至ったのかが理解できない。確かにアヤはイクスのあのでっかいベッドでフテ寝してやった。ちょっとした嫌がらせのつもりであったし、イクスが戻ってきたらちょっと文句を言って、それからソファに寝るつもりであったのだ。さすがに、庶民なアヤにあのでっかいベッドを占拠する度胸はない。いや、ないと思っていたのだが、意外と自分は図太かったらしく、イクスが戻ってくる前に熟睡してしまったらしいのだ。
そこは起こせよ宰相閣下。
それでなにをトチ狂ったのか知らないが、イクスはそのまま真ん中に寝ているアヤを横に転がし、己のベッドで就寝したらしい。
確かに、イクスの長身でソファに寝るのはちょっと苦しいというのはわかる。わかるけれども、乙女としてこれは納得いかない。同じ部屋で寝るというのと、同じベッドで寝るというのとは、大きな差があると思うのだ。アヤがそう主張するも、
「自分のベッドで寝て何が悪い」
とイクスが言い張った。この男、乙女の扱いがなっていない！
こうなっては、一刻も早いアヤの部屋の復活を進めねばなるまい。
そしてパンダはというと、宰相閣下のベッドを毛だらけにしてやっぱりアヤと一緒に怒られた。広いベッドの上を縦横無尽に転がったらしく、朝起きたらイクスの腰の後ろに転がっていた。今朝は寒

かったので、天然毛布効果でさぞ暖かだったであろう。そんなパンダのご飯は今日も気合いが入っている。何の食材だか知らないが、どうやらとても硬いらしい白っぽくて丸いものが皿に美しく盛られており、それをバリバリと激しく音を立てて食べている。イクス曰く、健康を考えて顎を鍛える食事を一日一回は食べさせる方がいいとなったらしい。あの白いのは果物で、中に甘い蜜が入っているという。それにしてもバリバリうるさい。

アヤの食事はというと、焼きたてパンにスープとサラダである。パンはふんわりもっちりと焼きあがっているし、スープだってとってもコクがあって美味しいし、サラダだって新鮮シャキシャキである。このような食事を食べさせてもらえて、文句を言うことなどできようか。給料日前になると食費を節約して一食抜かすこともあったアヤである、　こうして一日三度食事ができるということは素晴らしいことなのた。

しかし、だがしかし。あえて注文をつけるとするならば。

「お米が食べたい」

アヤはボソリと呟いた。

文句は無い、ああ無いのであるが。ちょっぴり贅沢を言わせてもらえるならば、アヤはお米を食べたかった。昔から、酔いどれ親父が生きていた頃から、アヤは食事は米派であった。あのもっちりした甘いお米を食べたい。いや、この際ジャポニカ米とかこだわらない、インディカ米でも妥協しようではないか。ギブミーお米！

「米というのは、アヤの故郷の食べ物か？」

アヤの呟きを拾ったらしいイクスが、不思議そうに尋ねる。

「そうです！お米はジャパニーズソウルフード！食とはすなわち米です！」

くわっと目を見開き、前のめりになるアヤに、イクスは椅子ごと後ずさる。

アヤの米を欲する魂に火をつけてしまったイクスに、延々と米の素晴らしさについて食事の間中語ってやると、ちょっぴりげんなり

した表情なイクスに厨房に入る許可を貰った。

異世界にもお米、あるといいな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5615w/

宰相閣下とパンダと私

2011年11月22日02時54分発行